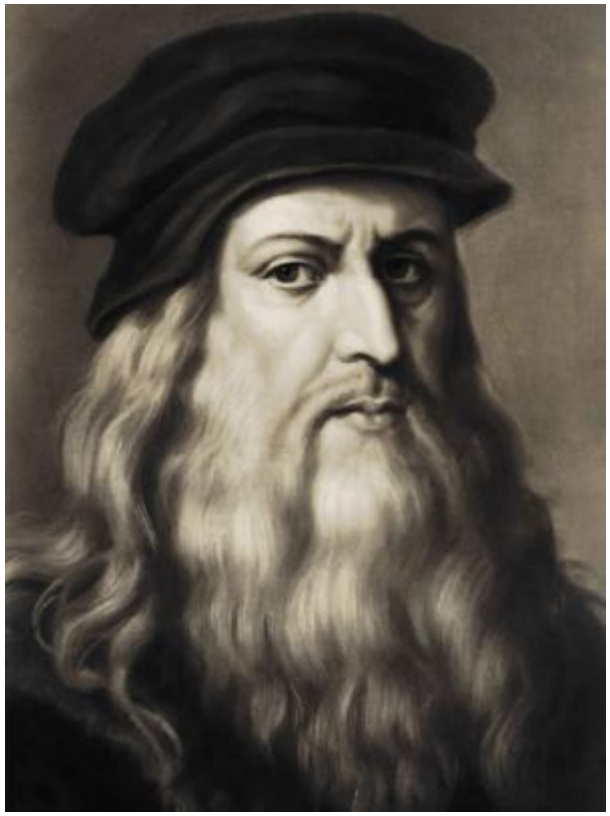
騙されざる者たち

作・演出　小野寺　丈

2019年　3月24日～31日

劇場・下北沢・小劇場B1



キャスト・登場人物

島田順司

柏崎龍三（かしわざき　りゅうぞう）（８０）

往年の大ベストセラー家。過去の人になりつつある。大豪邸。

柏原龍二（かしわばら　りゅうじ）（７８）

ベテラン詐欺師。ホクロ以外は大作家とソックリな容姿を利用し豪邸に入り込み、詐欺行為を隔てる。

真子京之介

松原修作（まつばら　しゅうさく）（６５）

せこい詐欺を繰り返す、小悪党。以前組んでいた神楽敬之助を裏切り、殺されるような思いをし、絶対に会えない。

小野寺　丈

神楽敬之助（かぐら　けいのすけ）（４９）

偽りの名刺を幾つも持ち、多業種を偽り詐欺に及ぶ。裏切り被害を被った松原を恨み、復讐を思い描く。

石田　隼

後藤田哲也（ごとうだ　てつや）（３３）

百戦錬磨の結婚詐欺師。亡き母の遺言となる、父は大作家の柏崎龍三という言葉に、憧憬と憎しみの複雑な思いで柏崎に詐欺を隔てようと画策する。

関　修人

乃木新平（のぎ　しんぺい）（２８）

手先が器用。ネットなどインテリ系の詐欺が得意。今回は松原と出逢い。共謀して大作家に対して詐欺を隔てる。

石井日菜

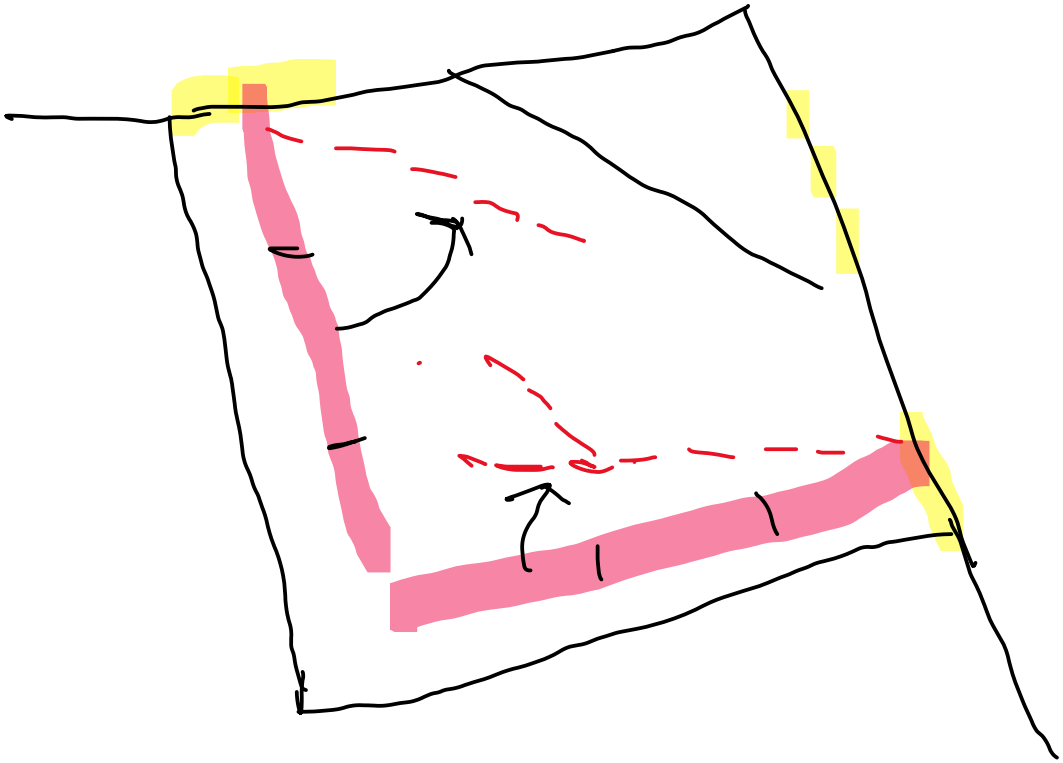
小堺玲奈（こざかい　れな）（２０）

神楽に騙されたと言い、後藤田の結婚詐欺に乗り復讐を隔てる。

仲宗根久乃

平盛こずえ（ひらもり　こずえ）（年齢不詳）　柏崎邸のメイド

舞台セット説明



※カーソルでなぞったもので、上手く描けず申し訳ございません

ひし形の舞台。上手と下手に客席。黄色線が出捌け口。下手側の出捌け口に直ぐ楽屋あり。

赤い線は、上手下手から伸びる、紗幕を使用した戸。畳んだりも出来、開閉自由。点線場所のように角度を変えて動かすことも出来、畳んだりも可能。場面により位置や角度を変え、別の風景を創ったり、舞台を紗幕戸で閉じても、紗幕なので中に照明が入れば透けて見えます。多種多用の演出効果が可能。

後方の横断している黒い線は、そこにオブジェを置き、そこから出し入れ出来、出すとそれが椅子に成ったりテーブルの代わりになったりして、これも多様な演出効果が望めます。

1場　プロローグ

セットは紗幕戸が閉じている状態。舞台面に沿った形か、スクリーン形か。

暗転と共に、紗幕内にぼんやりと灯。

その灯が動き、何かを物色している雰囲気。閉じてる紗幕戸も動かし、色々な部屋を物色している様子。その主は、柏原龍二（78）探している雰囲気で紗幕戸を動かし、ひし形の舞台のセンターをよぎるように真っすぐ揃えて平行にする。

この屋敷のメイド(平盛こずえ)が眠そうな顔で現れる（手にはランプのようなもの）

柏原は見られてはいけないと、慌てて身を隠す。

メイドはその姿を見つけてしまう。

メイド「先生？　先生ですよね？」

柏原　「（顔を隠しながら）え？」

メイド「（柏原の顔をランプで照らし、顔を隠していた手を避け確認）先生！何してるんですか？　暫く別荘にいるって、そう…」

柏原　「あ、あ、え、あの…」

メイド「帰るなら帰ると言って下さいよ。しかも、こんな夜中に。ビックリするじゃないですか」

柏原　「ああ、まあ、そ、そうだな。今度は気を付けるよ」

メイド「頼みますよ、先生。私、もう寝ますから。朝食、パンかなんかで宜しいでしょうか？」

柏原　「あ、ああ…、よろしく」

メイド「おやすみなさい」（捌ける）

柏原　「ああ。（ホッとする）なんで、主と俺を間違えてるんだ、あの女」

メイドがいなくなったのを確認してから、また何やら物色を始める。
ある写真立てを目にし、手に取ると、その写真を見て、驚く。

柏原　「え！？。なんでこんなに俺と…」

この時、上手下手の紗幕戸がセンターを過る様にスクリーン状に閉まっている。
（ＢＧＭイン・照明カットチェンジ（サスのみ））
写真が映し出される。柏崎龍三である。鼻の横に目立つホクロはあるが、それ以外は柏原そっくりだ。

柏崎の写真から（照明・アウト）、タイトル「騙されざる者たち」⬇　作・演出　小野寺　丈
⬇　出演　島田順司／真砂京之介／小野寺　丈／石田　隼／関　修人／石井日菜／仲宗根久乃

暗転

2場　ある路上

明転すると、松原修作が募金箱をぶら下げて、旗か立て札を持って、「アフリカの餓死する子供達」の為の募金を募っている。（路上の雰囲気ＳＥ・照明イン）

松原　「今、アフリカでは一分間に１７人もの子供たちが餓死でこの世を去っているのです。今、こうしている間に、一人、また一人と子供たちが…くうぅぅ（かなり臭く泣く）。そんな現実に、私は目を背けられずにぃぃ、くく（かなり臭く泣く）皆様の善意が子供たちを助けるのです。１

円でも、２円でも、出来れば、一〇万円以上、一気にこちらに入れて頂きたい！」

すると、反対から野木新平が、被災地の義援金を呼びかけながら現れる。

乃木　「近年日本列島を襲う天災は、各地に甚大な被害をもたらしております復興もままならない地域も少なくありません。少しでも皆様の善意で助けて欲しいのです」

怪訝そうに、乃木を見る、松原。

松原　「日本国内の被害も当然大事ですが、やはりアフリカの貧しさに、人間ならば目を向けるべきです。日本はほら見て下さい。ビルばっかり。アフリカなんて掘っ立て小屋ですよ。どっちが可哀そうですか？　普通の人間ならば、そりゃあアフリカでしょう。ですからここに、１円でも２円でも、出来れば３０万円を入れて頂きたい！」

乃木　「日本人が何でアフリカを気にしなきゃいけないんでしょう。遠い国のことなんか構っていられないほど、被災地は未だ苦しみ続けているんです。皆様の善意ある気持ちをお待ちしております」

松原、通りすがる人を見つけたようでー。

松原　「奥様、奥様…今、アフリカではですね。少々お待ちください。（腕時計を見る。１０秒ほどの間）…今の時間で、ガキが５人くらい死んでいるんです。お葬式も上げられないんですよ、アフリカは。葬式くらい上げさせてあげましょうよ。　ね、３０万円」

通行の人は、どうやら乃木の元へ向かった（無対象で表現する）

乃木　「こちらは被災地の募金です。３０万円なんて馬鹿な事言いません。ほんの少しでもいいんです」

ＳＥ・チャリンと募金箱に硬貨が入れられる音。

乃木　「ありがとうございます！（深々頭を下げる）」

その人を見送り、松原にドヤ顔を見せる、乃木。

松原　「お前、見慣れない顔だな」
乃木　「ええ。ここは初めてです」
松原　「邪魔しないでくれるか。俺の縄張りだから」
乃木　「募金に、縄張りも何も」
松原　「じゃあ、ホームグランドって言おうか」
乃木　「分かりますけどね。この辺、一番人通りがありますから」
松原　「ここしかねぇんだよ」
乃木　「お互い善意でやっている訳ですから、仲良くやりましょうよ」
松原　「いやいや、こっちはプロなんだから」
乃木　「プロ！？」
松原　「生活掛かってんだから」
乃木　「これ、生活費にしてるんですか！？」
松原　「あ、いやそうじゃなくて、アフリカの子供たちの為に、自分の生活をも賭けて、勝負させて頂いているんだ」
乃木　「説得力のある言葉を並べているつもりでしょうが、全く胸に響きません」
松原　「煩いんだよ、もう」
乃木　「すみません。生意気で」
松原　「いいんだよ。若い頃はそのくらいの方がいい。俺もそうだった。お前はなんで募金やってるの？」
乃木　「…善意の無い人は、お金をいれません。この中は善意の集まりなんです。俺、昔悪くて、迷惑かけたり、泣かせた人たちも多くて…。だから今、過ぎ去った過去を償うつもりでやっているんです」
松原　「いい事言うな。メモしとこ。今度使わせてもらう」
乃木　「…（微笑む）」
松原　「なんか飲むか？」
乃木　「ありがとうございます」
松原　「何がいい？」

乃木　「セブンイレブンのホットコーヒーLで砂糖抜きブラック」
松原　「すごい限定だな。この辺ファミマしかないから、それは無（理）」
乃木　「セブンイレブンの珈琲しか飲まないんです」
松原　「面倒くせぇ男だな」
乃木　「こだわりです」
松原　「どこにあんだよ。セブンイレブンなんて。分かった。自分で買ってこい」

そう言いながら、自分の募金箱に手を突っ込み、お金を取ろうとする。

乃木　「あ、そこから取ってる！」
松原　「あ、あ、違う違う！これ、ちゃんと後から補填するんだよ」
乃木　「どうだか。こんな、怪しい香りがほとばしっている顔の人見たことないから」
松原　「よく言われる、煩いよ！お前だってネズミ男みたいな顔して」
乃木　「どこがですか！？」
松原　「・・・お前さ」
乃木　「何ですか」
松原　「前、悪かったって、どんだけ悪かったの」
乃木　「まあ、大した事してませんけど」
松原　「例えば？」
乃木　「…そうですね…、モノ盗んだり、人、騙したり、カツアゲしたり、女、犯したり、刃物で刺したり」
松原　「メチャクチャやってんじゃねえか！」
乃木　「…はい。…でも、今はもう改心して、真面目に生きようと…。おかげで貧乏ですけど」
松原　「真面目な顔してるよ」
乃木　「ありがとうございます。やっぱりお宅は、今でも悪党なんですね」
松原　「ひっぱたくぞ！　だから、顔で決めんなって」
乃木　「すみません」
松原　「松原修作って言うんだ。よろしくな（握手を求める）」
乃木　「はい。乃木新平と申します（握手）」

松原　「…俺も、前は相当悪くてよ。相棒みたいな男を裏切って、金をたんまり騙し取った事があったんだ。そいつにだけは絶対に会えない。会ったら、間違いなく殺される。（スマホを出し、写真を探し出し、見せる）こいつだ」

一瞬暗くなり、紗幕戸に写し出される、神楽敬之助の写真。

松原　「こいつ、見かけたら、すぐ教えてくれよ。俺は直ぐ逃げる」
乃木　「はい…」

再び、明るくなる。

松原　「乃木、お前、今、金に困ってんだろ？」
乃木　「ええ、まあ」
松原　「金、貸してやろうか」
乃木　「え？　どうせ、高利貸しでしょ？」
松原　「利子なんかいらねぇよ。むしろ、1割プレゼントだ」
乃木　「プレゼント!?　なにそれ」
松原　「ちゃんと稼いでるから、こういう善意も出来るんだ。幾ら、欲しい」
乃木　「え、あ、じゃあ、１００万ほど…。そんな好条件、いいんですか？」
松原　「その代わり」
乃木　「はい…」
松原　「お前を信用してないわけじゃないけど、一応信用度を確認したいんだが。保証金というか、信用代として、先に１０万渡してくれ」
乃木　「？　そんなこと必要ですか？」
松原　「だから、信用度を確認したいんだって」
乃木　「信用度ったって…。今度でいいですか？」
松原　「今じゃなきゃ、ダメ」
乃木　「現金で今、持ってないっすよ」
松原　「それじゃあ、この話は無かったことに…」
乃木　「あ、そうだ。小切手なら」
松原　「そんなの持ち歩いてんのか」

乃木　「いや、たまたまです。（小切手を開き、書き始める）えっと…はい、１０万円ですね。はい、どうぞ（渡す）」
松原　「（しげしげ見て）これ、使えるのか？」
乃木　「勿論ですよ」
松原　「一緒に行こう。そこの銀行」
乃木　「こんな募金箱持って、銀行に入らない方がいいですよ。誤解されますから」
乃木　「行って来て下さいよ。僕、ここで待ってますから」
松原　「そうか。分かった」
乃木　「ああ、ほら、募金箱」
松原　「あ、じゃあ、持っててくれ」
乃木　「はい。分かりました」
松原　「頼むな（募金箱を渡して、銀行へ）」

乃木、松原が銀行へ入って行くのを確認して、松原の募金箱を覗き、ニタリととした後、笑いながら走り去る。
数間あった後、松原が―。

松原　「この小切手、使えないじゃ…（乃木がいないのに気付き）あれ、乃木？（逃げられたことに気付き）やられた！　何処行きやがった！」

怒り心頭に探し去る。

3場　小堺玲奈の部屋・内

※紗幕戸や後方オブジェから引き抜いた椅子などを使用し、部屋の雰囲気を作る。基本、キャストが芝居をしながら動かしたり、セッティングをすることになる。（ＢＧＭイン・照明変化）

玲奈と後藤田哲也は、ガウン姿や寝間着など二人の関係を直ぐ提示できるような姿で現れる。
哲也は項垂れて、元気がない。

玲奈　「ねえ」
後藤田「・・・」
玲奈　「哲也」
後藤田「ん？」
玲奈　「どうしたの？　帰って来てから、ずっと上の空。なんかあった？」
後藤田「うん。ちょっとトラブルがあって、お金が必要になって…」
玲奈　「いくら？」
後藤田「…５０」
玲奈　「…５０円？」
後藤田「それじゃ悩まない」
玲奈　「…５０万か…」
後藤田「どうしたらいいんだ…」
玲奈　「私も少し…」
後藤田「それはダメだよ。君に５０万も払って貰おうだなんて、これっぽっちも、お願いします」
玲奈　「え～…」
後藤田「ごめんごめん。何言ってんだ、俺。こんなに追い込まれたことなんてなくてさ…。どうかしてるよ」
玲奈　「哲也、なんとか私が…」
後藤田「ダメだって」
玲奈　「全額は無理だけど」
後藤田「あ、無理なの？」
玲奈　「どっちよ」
後藤田「ごめん。本当にどうかしてる。今日の俺」
玲奈　「２０万くらいなら、なんとか用立てられるけど、後は…」
後藤田「ごめんね。それでも、本当に助かるよ」
玲奈　「…前にさ、お母さんの話、言ってたじゃない？」
後藤田「ああ。亡くなる間際の話だろ」
玲奈　「そう。藤ヶ丘の豪邸にお父さんが入って行く姿を見たって…」
後藤田「でも、確証はないんだよ」
玲奈　「名前を言ってたんでしょ？」
後藤田「柏…と言いかけて、息絶えたんだ」

玲奈　「それが証拠よ。柏崎龍三って言おうとしたのよ、きっと」
後藤田「あんな大ベストセラー作家が俺の親父だなんて信じられないよ」
玲奈　「お母さんが言っていたように、困ってるんだから、お父さんを頼ったら？」
後藤田「一度も会ったことないのに、どうやって頼ればいいんだよ。生まれたことも知らないんだぞ」
玲奈　「妊娠してから別れたって事？　どうして、そんな」
後藤田「詳しくは知らないけど…。おふくろの事を快く思っていないかもしれないし…。俺の事も分からなきゃ、ハナシになんないでしょ」
玲奈　「…一つだけ、方法があるわ」
後藤田「何？」
玲奈　「私が、世界一憎んで、絶対に許せない男、知ってるでしょ」
後藤田「詐欺師の男か。お前が大金持って行かれたって」
玲奈　「そう。神楽敬之助。この間見かけたのよ。近くにいるわ。絶対に見つけ出して…」
後藤田「その男を見つけて、どうするんだ？」
玲奈　「もう口八丁手八丁、天才的な詐欺師だから、神楽を上手く操って、お父さんから大金を貰ったら、今度は私たちがアイツの前から消えてやるの。復讐よ。ついに、その日が来るのよ」
後藤田「そんなに簡単にいくか？」
玲奈　「どんなことがあってもやるわよ！　絶対に復讐してやる」
後藤田「・・・」
玲奈　「お金に困ってんでしょ」
後藤田「まあ…」
玲奈　「じゃあ、乗らない話じゃないでしょ」
後藤田「そうだな」
玲奈　「・・・」

後藤田に抱きつき―。

玲奈　「哲也のためよ、全て。２０万も明日卸して直ぐ渡すから。…好きなの。貴方の事が本当に好きなの」
後藤田「…ありがとう」

強く抱き締める。（ＢＧＭイン・照明変化）
紗幕戸のセット転換・次シーンの登場人物とオーバーラップする。

４場　柏崎龍三邸・内

柏原龍二は他人の家に住みつこうとしている。ガウンなど羽織り、優雅な振る舞い。　陶芸品を持ち出し、数個並べている。
その陶芸を鞄に入れ始めている。
メイドの平盛が現れる。

メイド「先生」
柏原　「おお、君か」
メイド「何やってるんですか？」
柏原　「見りゃ分かるだろ」
メイド「先生、好きですね。陶芸品」
柏原　「ああ、そうなのか」
メイド「他人事ですね」
柏原　「これは誰の作品だ？」
メイド「北大路羅人山（きたおおじらじんざん）しか買わないじゃないですか」
柏原　「え！？　あの世界の北大路羅人山か！　高いだろ！　幾らするんだ？」
メイド「先生が買ったんですよ」
柏原　「・・・だったな。…というと、俺は幾らで買ったんだ？」
メイド「知りませんよ」
柏原　「大体、俺は幾らで買ったと思う？　忘れちゃったんだよ」
メイド「何千万円とか自慢してましたよ」
柏原　「うわぁお！　そりゃもうウハウハだな」
メイド「ウハウハって」
柏原　「これ全部、北大路か？」
メイド「半分くらいは先生が造りましたよね？　そっくり真似して造るのが趣味でしょ？」

柏原　「なんでそんなことするんだよ！」
メイド「知りませんよ。ご自分がされたことでしょ」
柏原　「見分けがつかないじゃないか、本物と偽物。どうしてくれる！」
メイド「だから、ご自分がされたことですから」
柏原　「参ったなア」
メイド「なんでです？」
柏原　「本物か偽物か分からないと出せないから」
メイド「出すって？」
柏原　「メルカリ」
メイド「メルカリ！？」
柏原　「ポチッと、楽だろ？。よく売れるんだよ、これが」
メイド「そんなことしてたんですか！？」
柏原　「素人相手が一番いいんだ。足がつかないから」
メイド「何を言い出すんですか、先生。先生とあろうお方が、メルカリで物売ってるなんて」
柏原　「食ってかなきゃいけないだろ」
メイド「お金に困ってないでしょ！」
柏原　「そうなのか」
メイド「急に戻ってきて、訳の分からない事言い出して。向こうで何があったんですか？」
柏原　「向こう？」
メイド「別荘ですよ」
柏原　「別荘…」
メイド「そうですよ。３０日まで帰って来ないと言ってたじゃありませんか」
柏原　「という事は、３０日まで帰って来ないんだな？」
メイド「・・・ん？」
柏原　「俺は」
メイド「本来はですよ。だから、なんで今ここにいるのかが分からないんです」
柏原　「君は向こうには行かないのか？」
メイド「泥棒が心配だから留守番しててくれって言ったのは先生ですよ」
柏原　「そんなこと言ったのか、俺は！」
メイド「急激に呆けられて、心配です。悪化して徘徊とか…」
柏原　「ないない。徘徊はない」

メイド「そう考えても、徘徊して此処まで来たとしか思えないんです」
柏原　「ああ、そういうこと」
メイド「（柏原の顔をジッと見ている）先生。ホクロ、どうしました？」
柏原　「ホクロ？」
メイド「鼻の付け根にあったホクロ」
柏原　「ああ～、アレね。実は…取り外しが自由なんだよ」
メイド「ホクロ、取り外せるんですか！？」
柏原　「ホクロだけじゃないんだよ。乳首だって取れるぞ」
メイド「ええ～！？」
柏原　「首だって、グルッと一回転するんだ。こうなるとホラー映画だな。アハハハ」
メイド「せ、せ、せ、先生がぁ～（怖くなって逃げだす）」
柏原　「ジョーダンに決まってんだろ（既にメイドはいない）あれ？　面倒な女だな。仕事になんねぇよ。さあ、さあ、出品するぞ」

柏原は陶芸品を手にし、捌ける。
※次の登場人物が紗幕戸を動かし、転換をする。（照明・変化。ＢＧＭイン）

５場　ある路上

後藤田哲也が（上手から）現れ、玲奈を待っている。
（下手より）玲奈が銀行帰りで、現金の入った封筒を手にし、哲也に渡そうと傍に寄る。

玲奈　「はい。約束通り。２０万入ってる（封書を渡す）」
後藤田「（中身を覗き）ありがとう、玲奈。本当に助かるよ」

すると、神楽敬之助が目の前を通り過ぎる。
玲奈は、その顔を見ると、一気に顔色が変わる。

玲奈　「あ！」

後藤田「え？」

玲奈の声に、神楽はふと目をやるとー、

神楽　「！！（驚愕）」

神楽は、そそくさと逃げ出す。

玲奈　「あいつだ」

（ＢＧＭイン・照明カットチェンジ）

６場　回想（神楽の事務所・内）

玲奈にサス照明。紗幕戸を哲也と神楽で動かし、紗後ろを室内に作る。
玲奈が動き出す（サス・アウト。紗後ろのみ照明）
紗幕戸に向かって、ノック（ＳＥ）

神楽　「入っていいよ」

玲奈は紗幕戸を開けて、中へ入る。客席からは紗幕越しの絵となる。

玲奈　「失礼します」

神楽　「玲奈ちゃん。髪の毛切ったね。可愛い、可愛い。ちょっと後ろ向いて。
（玲奈は後ろを向く）来た、来た、来た。やっぱりこういう服の方が似合うね。この腰のライン。ね、こう、キュッときてグイッとなってボボン。こういう子が売れるんだよ。キュッときて、グイッとなって、ボボン…って子が売れる。グーグーベリーグ―、じゃあ、座って」

玲奈　「はい（オブジェの椅子に腰掛ける）」

神楽　「…で、決めた？　この前のハナシ」

玲奈　「あの…一つだけ、引っ掛かっていることがあって…、本当に脱がなきゃいけないんですか？」

神楽　「あ、そこ？　これね、ハッキリ言うけど、脱いだもん勝ち。脱いだら売れる、売れるなら脱ぐ。こういう世界だから、芸能界。脱いだら、君。そのキュッときて、グッとなって、ボボンが露わになるわけよ。そうしたらもう、完全に売れちゃうから」

玲奈　「あと…、そんなに掛かるんですか？」

神楽　「金のハナシ？」

玲奈　「…はい」

神楽　「勿論だよ」

玲奈　「でも、一千万って…」

神楽　「用意出来ないんだ？」

玲奈　「いや、何とか借りました…。ただ、そんなに必要なものなのかと…」

神楽　「必要に決まってるでしょう。あ、だけど、こっちには入らないよ、一銭も。全部配り歩くんだよ、プロデューサーや監督たちにね。その後に、念には念を入れて、枕営業。これで完璧」

玲奈　「はあ…」

神楽　「じゃあ、一千万持って、このホテルに来て。これ、カードキー」

玲奈　「はい…」

神楽　「待ってるよ」

玲奈は紗幕戸を開け、外へ出る。

7場　元の路上

（紗幕戸閉めキッカケで、照明カットチェンジ（紗幕内・消す。紗前のみ照明・路上のSE）

後藤田哲也も現れている。

玲奈　「…てなことがあったの。…もう思い出すだけで…オエ～！！　なんで、あんな男と寝ちゃうたのよ、私は！。許せない！　神楽を殺す！」

後藤田「少し落ち着いた方が…」

玲奈　「絶対に殺す！」

玲奈、走り始めのキッカケでＢＧＭイン。照明・変化
紗幕戸が動き出す。乃木や神楽、玲奈、後藤田が紗幕戸を動かし、人々が流れて行くイメージを作る。
乃木は懸命に逃げている様子。舞台が出来ると、オブジェの腰掛け場に腰掛ける、乃木。

周囲を気にするが、ここまで来れば一安心とばかりに、募金箱の中身を出す。

乃木　「あのオッサンやるなあ。結構集めてんじゃん（嬉しそうに笑う）」

神楽が現れる。
乃木が募金箱から出したお金を懐に入れるのを見て注意しようとする。
遅れて、玲奈と後藤田が追ってくる。後藤田は直ぐに神楽を捕まえようとするが、玲奈が制し、暫く様子をみようと隠れて見つめている。

神楽　「ちょちょちょちょ、何してんだ、君」
乃木　「何が」
神楽　「何がじゃないよ。募金箱のお金を懐に入れただろ」
乃木　「失くしちゃいけないから、大事に仕舞ったんだよ。誰だよ、オッサン」
神楽　「俺か？　俺は（懐から黒手帳を出し、直ぐ仕舞う）　こういうもんだ」
乃木　「ん？　何？」
神楽　「だから…（高速で手帳を入れたり出したりする）こういうもんだ」
乃木　「え？　わかんねぇって」
神楽　「もっと近づいてみろ。そうそうチャンスを無いぞ。いいか。これだ
　　（チラッと出す）
乃木　「だからもっと、ゆっくり出してくれよ」
神楽　「わかったよ。よく見ておけよ」

今度はゆっくり出すが、手帳をクネクネ動かし、乃木も顔を近づけ，動きに合わせて手帳を追い、滑稽に映る。

乃木　「わかんねぇーって！！」

神楽　「そういうのを逆ギレっていうんだよ。このシチュエーションでお前を注意しようと黒手帳を出したら、ふつう分かるだろ。　手帳と言えば？」
乃木　「コクヨ」
神楽　「引っ叩くぞ。いい大人が真面目な顔して「コクヨ」じゃねえよ。なんでメーカーなんだよ。このシチュエーションでコクヨの社員がお前に話しかけて何が面白い。ほら、よくドラマとかで、何かあると手帳出してメモしたりして」
乃木　「俺、メモはスマホだから」
神楽　「そういう事言ってんじゃないよ」
乃木　「それより、おじさん、前に会った？」
神楽　「会ってないだろ」
乃木　「思い出せないんだけど、見た顔なんだよ」
神楽　「よく言われる。だいたい、ムロツヨシかコロッケに似てるって言われる」
乃木　「似てるんじゃなくて、何処かで会ったか、見かけたか」
神楽　「ま、はぐらかしてるつもりだろうが、そうはいかない。警察の者だ（また高速で手帳を出し入れ）」
乃木　「え？」
神楽　「お金出して」
乃木　「あ…はい（渋々出し、お金を箱に入れる）」
神楽　「じゃあ、募金箱だけ署まで連行する」

一人で行こうとする、神楽。

乃木　「ちょっと待って、ちょっと」
神楽　「なんだ？」
乃木　「…え？」
神楽　「何？」
乃木　「…募金箱だけ？」
神楽　「そうだよ」
乃木　「おかしいでしょ」
神楽　「いいんだぞ。なんならお前も一緒に連行して、臭い飯食わしても」
乃木　「いや、それは…」

神楽はそそくさと去ろうとするが、目の前に玲奈が立ちはだかる。
見た瞬間、神楽は「やばい」と乃木の後ろに隠れて、腰のあたりに顔を埋める。

乃木　「な、な、なに」
玲奈　「（乃木に近付き）（神楽を指差し）誰？」
乃木　「いや、この人…」
神楽　「兄弟だ、兄弟。言い方によっちゃ逮捕するぞ、弟！　弟、聞いてるか！」
乃木　「わ、分かったよ、兄ちゃん！」
玲奈　「あなたのお兄さん、お名前は？」
乃木　「名前！？　えっと…、ムロツヨシ」
玲奈　「ムロツヨシ！？」
神楽　「さすがに違うだろ！」
乃木　「アレです、アレ…。メンチカツ」
玲奈　「メンチ…」
神楽　「コロッケと間違えてんだろ！？」
乃木　「そうです、そうです。コロッケ」
玲奈　「何言ってるの、さっきから」

そこへ、募金箱を奪われた松原が乃木を追って来て、周囲を伺っている。
乃木は、松原の姿を見てー、

乃木　「！！」

松原に会いたくない乃木は、咄嗟に玲奈の後ろに隠れて、神楽も続く金魚の糞状態になる。

玲奈　「何、何、何」
松原　「（その姿を見て）・・・」

玲奈が動くと、連なって動く。

松原　「お宅、一体何してるの？」
玲奈　「私もちょっと、よく分からなくて」
松原　「分からないだけで、この状態にはならないと思うけど」
玲奈　「まあ…」

神楽が手にしていた募金箱に気付き。

松原　「あ、これ、俺の募金箱だ」

松原、それを取ろうとするが、抵抗する神楽。

神楽　「止めろって、何するんだよ」
松原　「俺のだって、お前何するんだよ！」

ふんずもつれつになり、神楽は顔を上げると、松原はその顔を見てー、

松原　「あ！」

神楽に会いたくない松原は速攻で顔を隠したくて、玲奈のお腹に顔を埋める。
得体の知れない集団となる。

後藤田「な、何が起きてる。今、何が起てるんだ。ま、待ってろ、玲奈。今、離すから」

神楽の所へ回り込み、必死に引っ張って離そうとするが、後方から性的にドッキングしてるようにしか見えない状態になる。

後藤田「ちょっと離れて、離れて下さいって」
神楽　「ダメ、ダメ、絶対にダメ」
後藤田「力を抜いて下さいって。力を抜いて」

神楽　「（引っ張られ）痛い痛い痛い」

そこへ、家に戻ろうとしている柏崎隆三がやって来て、その光景に立ち止まる。

柏崎　「・・・・」
後藤田「力を抜いてって」
神楽　「痛いって言ってるだろ」
柏崎　「・・・・」

柏崎は、見ない事にしているように、静かに戻る。
神楽は後藤田に根負けして、引っ張られ、後藤田と一緒に後方へ倒れる。
神楽は募金箱を持ったまま、走り去る。

玲奈　「あ！　待て！」

しかし、前後に人に掴まれて、行けない。

玲奈　「哲也、追って！」
後藤田「わかった！（追い掛ける）」
玲奈　「ああ、もう離して！」

力づくで松原と乃木を振り切って、追いかける。
松原と乃木が残される。

松原　「・・・・」
乃木　「（松原と目が合い、急に土下差をする）本当に申し訳ありません！！
　　つい出来心で！　反省しております！　本当にすみませんでした！！」
松原　「お前、神楽と知り合いなのか？」
乃木　「神楽？」
松原　「お前の後ろにいた」
乃木　「あ、警察の方？」

松原　「警察？　警察の訳ないだろ。あいつは生粋の詐欺師だ。俺と一緒に組んでいたが、俺が裏切ってアイツを捨てたんだ。絶対に会いたくない男だ。お前に写真を見せただろ」
乃木　「ああ、それで、何処かで見た顔かと」
松原　「お前も相当な詐欺師だな」
乃木　「あ、はい。すみません」
松原　「一人でやりたいのか？」
乃木　「特に決めてはおりませんが…」
松原　「俺と組まないか？」
乃木　「え？」
松原　「詐欺師の俺を騙せたんだ。相当な腕だ。　一人じゃ限界があるだろ？　力を合わせれば、大きな仕事が出来る。一緒にやらないか？」
乃木　「いいんですか、僕で」
松原　「だから声を掛けたんだ」
乃木　「藤ヶ丘にでっかい豪邸があるの知ってます？」
松原　「作家の家だろ？」
乃木　「そうです。あそこ狙いませんか？」
松原　「面白そうだな。あれだけの屋敷だと、うまくやれば一攫千金も夢じゃないな」
乃木　「ええ。色々と調べてみましょうよ」
松原　「だな」
乃木　「はい。…宜しくお願いします」

BGMイン・照明変化。
乃木、松原は捌けながら、紗幕戸を動かしたり、次シーンの転換を手伝う。

8場　柏崎邸・内

柏崎隆二が何かを物色している。
そこへ、メイドの平盛が出て来る。

メイド「先生」

柏原　「ああ」
メイド「いつも何かを物色してますね」
柏原　「人聞き悪いな。探し物してるんだ」
メイド「何探してるんです？」
柏原　「…うん。　置き忘れてきた俺の心だ」
メイド「…気の利いた言葉を使っている割には、説得力が一つもありません」
柏原　「評論家並みに厳しいな」
メイド「よく先生も言いますよ、私に」

柏原、ある場所を見て、驚く―、

柏原　「！！…」

柏原は走り去る。慌てふためく柏原を不思議に思い―、

メイド「先生？　ど、どうしました、先生！…、最近、本当に様子がおかしい。呆けとも違うような…、まるで人が変わっちゃたみたいに…」

すると、柏原が見ていた方角から鼻の根基にホクロがある、柏崎龍三が現れる。

柏崎　「ただいま」
メイド「わぁ！？　え？何何、何処通って来たんですか！？」
柏崎　「普通に玄関から入ってきたよ。ただいま」
メイド「おお～凄い！　お帰りなさい、マジシャン！」
柏崎　「何を言ってるんだ。あ、そうそう平盛君、帰る途中、凄いの見たぞ。道端で人がドッキングしたまま連なってるんだよ。あれは何だったんだ。危うく興奮しかけた」
メイド「それもそうですけど、あっちの部屋に行ったのに、玄関の方から現れる方がビックリしますよ」
柏崎　「何の事だ？　」

柏崎は、何かを探し始める。

メイド「まだ探してる」
柏崎　「まだって、今からだろ、探すのは」
メイド「きっと、見つかりますよ」
柏崎　「そうか」
メイド「はい。先生なら見つける事が出来るはずです」
柏崎　「君は、私が何を探しているか分かっているか？」
メイド「知っています。置き忘れてきた心でしょ？」
柏崎　「…え？」
メイド「置き忘れてきた心」
柏崎　「気の利いた言葉を選んでいる割には、説得力が何一つないんだよ。なんで、そんな抽象的なものを探さなきゃいけないんだ。資料を探しに帰ってきたんだよ、私は」
メイド「資料ですか？」
柏崎　「ああ。今度の新作はな、登場人物が全員詐欺師っていうアイデアが浮かんで。こりゃあ面白と思ったけど、そこから先が全然思い浮かばなくなって。煮詰まっちゃって、煮詰まっちゃって。こんなに難産になった作品も初めてだ。だけどな、一個キッカケを掴んだら、ドバーっと物語が転がっていったんだ。不思議なもんでなあ」

メイドの平盛は、そんな話より、ホクロが気になって気になって仕方がない。

メイド「先生」
柏崎　「なんだ？」
メイド「意味あるんですか？　今、付けて」
柏崎　「何を？」
メイド「ホクロ」
柏崎　「ホクロ？」
メイド「そうです。何をきっかけに付けたり外したりするんです？　どうせ付けるなら、こんな変な場所じゃなくて、もっといいトコに」
柏崎　「何を言ってるんだよ」
メイド「だから、ここじゃなくて」

柏崎のホクロを取ろうと、引っ張っている。

柏崎　「痛い痛い痛い」
メイド「なんの接着剤、これ。凄い」
柏崎　「君は何をしょうと…」
メイド「確か、ここも…」

柏崎の両乳首を引っ張る、メイド。

柏崎　「何すんだ、痛痛痛ッ」
メイド「全然取れないじゃないですか」
柏崎　「当たり前だろ！　こんなとこ取ったり外したり出来たら、人間じゃないわ」
メイド「あと、首は回さないで下さいね」
柏崎　「出来るかそんなこと！　悪魔しか出来んわ、そんなの！」
メイド「ご自分が出来るとそう仰って…」
柏崎　「君は大丈夫か？　変な子だな。（探し始める）あれ？　ここに確か、資料の山があったんだが。片付けたのか？」
メイド「メルカリに出品したんじゃありませんか」
柏崎　「メルカリ？　なんだその文学賞は？」
メイド「よく売れるらしいんですよ」
柏崎　「売れるのか？　そこに出品すると」
メイド「だって、そう…」
柏崎　「いい事聞いた」

スマホを出して、電話を掛ける。

柏崎　「あ、もしもし、私だ。メルカリ文学賞に出すぞ（言いながら捌ける）。（柏原になりながら、声のみ）…知らないのか？　メルカリだ。…何？　卵被った黒いヒヨコ？　それは、カリメロだ！　だから、メロカリ、あ、いや、カルメリ、えっと、何だっけ？」

直ぐに、柏原が入って来る。

柏原　「平盛君、平盛君！」
メイド「あ、ホクロ取ってる。今度はなんで取ったんですか！？」
柏原　「いつ帰る？　いつ」
メイド「誰が？」
柏原　「…俺が」
メイド「はあ？」
柏原　「俺はいつ向こうへ行くと思う？」
メイド「あの世ですか？」
柏原　「そんなとこ行くわけないだろ！　別荘だ、別荘」
メイド「自分で決めて下さいよ」
柏原　「決められないから聞いてるんでしょ」
メイド「知りませんよ。本来は気晴らしで別荘に行って、執筆は本家だったのに、今はすっかり逆じゃないですか？」
柏原　「いつものパターンを教えてくれないか？　大体何日くらい滞在して別荘に行くのか」
メイド「直ぐに行く時もあれば、長く居座る時もあります」
柏原　「どっちかにしてくれよ！」
メイド「先生次第でしょ」
柏原　「頼むから、俺に会ったら、直ぐに向こうに行くように言ってくれないか？」
メイド「何を言ってるんです、さっきから」
柏原　「俺は優柔不断なんだよ！　だから、ビシッと言って欲しいんだよ」

そう言いながら、柏原は去る。

メイド「…（ちょっと考えて）あ、もしかしたら、甘えてんのかしら、私に。先生、可愛い」

今度は柏崎が登場する。

柏崎　「平盛！メルカリなんて文学賞、無かったぞ。適当な事言って！」

メイド「ムフッ（ニタッと笑う）」
柏崎　「なんだよ」
メイド「甘えん坊なんだから、先生」
柏崎　「はあ？」
メイド「人に頼らないと生きられないんですね」
柏崎　「誰が？」
メイド「お前は別荘へ帰れ！」
柏崎　「え？」
メイド「別荘に帰ればいいんだよ！」
柏崎　「な、なんだよ？」
メイド「それか、あの世にいくか！」
柏崎　「ど、どうしたんだよ、急に」
メイド「ビシッと言ってやってんだよ！」

平盛のあまりの圧力にタジタジで、柏崎も圧倒されて、二人で捌けていく。

9場　ある喫茶店

（BGMイン・照明変化）神楽と後藤田と玲奈が現れ、上手と下手の紗幕戸を動かし、または後方オブジェから椅子などを出し、喫茶店を形造る。紗幕内に神楽が座っている。その外では、後藤田と玲奈がー。

玲奈　「あそこにいる」
後藤田「募金箱から金取ってるよ」
玲奈　「私が行くと逃げるから、哲也、頼むわよ」
後藤田「どうすればいい？」
玲奈　「先ずは、デビューしたいとか言って近付けば、直ぐ乗って来るわよ。それから、何とか、お父さんの豪邸に連れて行く。いい？」
後藤田「ああ」
玲奈　「そこで、あの大作家が本当に哲也のお父さんかどうかを聞く」
後藤田「…やっぱり聞くのか」
玲奈　「嫌なの？」

後藤田「…なんか…、知りたいような、知りたくないような…」
玲奈　「何言ってるの？　お金が欲しいんでしょ？」
後藤田「まあね…」
玲奈　「本当に哲也が子供だったら、養育費でも慰謝料でも何でも行けるでしょ。それを貰ったら、アイツには一銭も渡さずに姿を消せばいい」
後藤田「うまくいくかな」
玲奈　「調子いいから、ほいほい乗って来るわよ」
後藤田「そうか」
玲奈　「頼むね」
後藤田「うん」

後藤田は店に入って行く。（紗幕戸を開けると、店内のＢＧＭが零れる）
玲奈は、スマホにラインが入ったようで、それを見ながら捌けていく。
神楽は新聞を読んでいる。
後藤田が笑顔で神楽の前に立つ。

後藤田「神楽さんですよね？」
神楽　「（ビクンと）ああ」
後藤田「すみません。いきなり声を掛けちゃって。外でお見掛けしたもので」
神楽　「そうですか。で、何でしょう？」
後藤田「顔が名刺とよく言いますけど、一応…（名刺を渡す）」
神楽　「（それを見て）俳優さん？」
後藤田「はい。神楽さん、有名です。名マネージャーで」
神楽　「ああ、そうかい。私はこういう…（自分の名刺を渡す）」
後藤田「（名刺を見て）獣医！？」
神楽　「はい、獣医！あ、違う違う（名刺を取り返し）、其れ間違い。こっち（別の名刺を渡す）」
後藤田「（見て）弁護士？」
神楽　「そんなわけない（名刺を取り返し）。ね、えっと、こっちこっち（別名刺を）」
後藤田「（見て）探偵」
神楽　「返して頂戴（名刺を奪い）あれ、どれだっけ」
後藤田「すみません。本当の名刺を頂けますか？」

神楽　「あったあった、これこれ。芸能関係はこっち（名刺を渡す）ね。芸能事務所・神楽坂４９。これ、自分の歳。代表取締役社長、これです」
後藤田「名刺、沢山持ってますね？」
神楽　「何でもやらないと、今の時代はね。それで、君はどうしたいの？」
後藤田「今、フリーで活動してるんですけど、なかなか仕事がなくて…」
神楽　「フリーはダメだな。入る？　神楽坂４９」
後藤田「入りたいんですが、事務所名なんとかなりませんか？　人に言えません」
神楽　「そう…。神楽４９歳でもいいよ」
後藤田「似たようなもんです」
神楽　「名前は何だっていいんだよ。とにかく売り出すためにはお金が掛かるから。まず３００万くらいは必要かな」
後藤田「そうですか。やはり…」
神楽　「だけど、イケメンだし、君、お金さえかければイケるよ。３００万」
後藤田「そんなに掛かるもんなんですね…」
神楽　「掛かるんだよ。本来なら1千万は必要なくらい。３００、無理？」
後藤田「自分の力では難しいのですが、一攫千金も夢ではない話が…。そこで調達出来れば、３００万どころか1千万も可能なのですが…」
神楽　「（身を乗り出す）それは…？」
後藤田「藤ヶ丘の豪邸ご存じでしょうか？」
神楽　「知ってるよ。有名じゃないか。あれだろ、柏崎龍三の家だろ？　それがどうした？」
後藤田「もしかしたら、僕が隠し子かもしれないんです」
神楽　「え！？　柏崎龍三の？」
後藤田「はい」
神楽　「それは、金になる話だな」
後藤田「でしょう。先ず、本当に僕が彼の子供なのかどうか、調べてもらいたいのですが」
神楽　「俺が？」
後藤田「だって、探偵で弁護士ですものね」
神楽　「ああ、当日は、弁護士の名刺を差し出すよ」
後藤田「くれぐれも獣医の名刺だけは渡さないで下さいよ」
神楽　「当たり前だろ」

後藤田「はい。日程など、追って連絡致します。この名刺の番号は合ってますよね？」
神楽　「そこで大丈夫だ」
後藤田「承知いたしました」

（ＢＧＭイン・照明変化）次シーンへ転換。
神楽、後藤田、松原、乃木が動き、紗幕戸などをセッティング。

１０場　松原宅・内

（紗幕前に）松原と乃木がいる。作戦会議である。
地図や宅配物のゴミなど。

乃木　「（地図で説明）ここです。ここが大富豪の家」
松原　「さすが、高台にあるな」
乃木　「柏崎龍三。作品が何本もドラマになっていますね」
松原　「大作家だよ」
乃木　「ですね」
松原　「その人の家」
乃木　「そうです。見て下さい、これ（宅配の配達表など）ゴミあさって宅配の空き箱でゲットしました。執念の個人情報です。電話番号があれば　こっちのもんですよね」
松原　「連絡が取れることで、色々と仕掛けられるな。誰かの紹介とも言えるし、信用度が変わってくる」
乃木　「ちょっと俺、軽いジャブ打って、様子みますわ」

言いながら、配達表の電話番号をスマホに打っている。

松原　「おい、大丈夫か？」
乃木　「任せておいてください」

スマホを耳にあてると、照明カットチェンジ（紗幕後方へ）

松原と乃木はストップモーションで。

11場　柏崎邸・内と松原宅・内

紗幕越しに、前が松原宅で後ろが柏崎邸。

【柏崎邸・内】

柏原がキョロキョロとしながら、そろりそろりと現れる。
そこへ、メイドの平盛が現れると、驚く柏原。

柏原　「！！　ああ、ビックリした」
メイド「どうしました？」
柏原　「俺かと思った」
メイド「はい？」
柏原　「だから、柏崎龍三かと思ったんだよ」
メイド「それは先生ですよね？（手の平で指し示し）」
柏原　「そう！　で、まだ居るのか？」
メイド「誰がです？」
柏原　「俺が」
メイド「は？」
柏原　「だから俺は別荘に行ったのか？　俺が何処に行ったか分かるか？」
メイド「俺って…」
柏原　「だから、俺だよ。会いたくないんだよ。いや、会っちゃいけないんだよ、俺とは」

電話が鳴る。

柏原　「（それに驚く）ウワッ！」
メイド「お電話です」
柏原　「わかってるよ」

何故かおそるおそる電話に出る。

柏原　「はい」

【松原宅と柏崎邸】

紗幕前の乃木と松原にサス（若しくは小さなエリア照明）

乃木　「オレオレ」
柏原　「…俺？」
乃木　「オレオレ」
柏原　「俺もオレだけど、俺は何処に居るんだ？」
乃木　「だから俺だって」
柏原　「いや、俺は分かるけど、俺も俺なんだよ。それよりも、俺が何処に居るか知りたいんだよ」
乃木　「俺だよ、わかる？」
柏原　「分からないから聞いてるんだろ！　俺は別荘か？　俺は何処に居る？　俺は俺に会いたくないんだ。お前が俺なら、俺の居場所くらい分かるだろ！」
乃木　「ああ～！！」

乃木、スマホの電話を切る。そのタイミングで後方の照明はアウト。

【松原宅・内のみ】

松原　「どうした？」
乃木　「こっちもあっちも俺だらけなんです」
松原　「何？」
乃木　「説明する事すら困難な出来事に遭遇した感じです」
松原　「手強いのか？」
乃木　「手強いと言いますか、人間と話している気にはなれませんでした」
松原　「なんだそれは」
乃木　「相当、これは覚悟して臨まないと、大変な世界に引きずりこまれます

よ」

松原　「こりゃあ、綿密に作戦を練らないと騙せないな」

乃木　「はい。そうですね」

松原　「柏崎龍三は、陶芸品の収集家として有名なんだよ」

乃木　「陶芸品…（直ぐにスマホで調べ始める）」

松原　「適当な陶芸品を掴ませて、高額で買わせる。どうだ？」

乃木　「一番乗りやすいネタだと思います（スマホを見せ）これは、どうですか？」

松原　「３０万か。高いな」

乃木　「超有名な陶芸家の作品です。本物だったら、相当に安いですよ」

松原　「偽物だったらどうするんだ？」

乃木　「どうせ偽物を売るつもりだったでしょ」

松原　「そうか」

乃木　「鑑定書次第ですね」

松原　「お前、作ったことはあるか？」

乃木　「得意ですよ。何度か作ったことがあります。お任せください」

松原　「頼むな。絶対に成功させるぞ」

乃木　「はい！」

二人、決意し、動き出す。

１２　柏崎邸・内

チャイムの音。

メイドが出てきて、閉まっている紗幕戸を開け、出て行く。

メイド「はーい！　少々、お待ちください」

神楽が現れる。

神楽　「突然申し訳ございません」

メイド「はい」

神楽　「ちょっと依頼されまして、先生にお尋ねしたいことがございまして…」
メイド「どちら様ですか」
神楽　「あ、えっと（慌てて名刺を渡す）こう云う者です」
メイド「（名刺を見て）ああ、向こうの方に依頼されたのですね？」
神楽　「向こう？　ええ、まあ…」
メイド「どうぞおあがり下さい」
神楽　「お邪魔致します」

紗幕戸の後方へ案内をし、オブジェの腰掛けに座らせる。

メイド「こちらでお待ちください。今、先生を呼んでまいります」
神楽　「宜しくお願い致します」
メイド「では」
神楽　「あ、すみません。先生とは初めてお会いするのですが、先生はどんな方ですか？」
メイド「ある時期から、とても甘えん坊さんです」
神楽　「甘えん坊…」
メイド「それと、首が３６０度回転して、ホクロと乳首が取り外し自由です」
神楽　「（あまりの発言に腰掛けから滑り落ちる）な、な、なんですか、それは」
メイド「ムフ（意味深な笑み）」

紗幕戸を開け、前方へ出て、また閉める。

メイド「先生」
柏崎　「なんだ？」
メイド「お客様です」
柏崎　「客？」
メイド「依頼があって、いらしたそうです」
柏崎　「なんの依頼だよ」
メイド「先生がこちらにいらした時は、別荘近くの病院にワンちゃん達を預けられてるんですよね？　おそらくその関係かと（名刺を渡す）」
柏崎　「（名刺を見て）獣医」

メイド「はい。獣医の先生です。先生のとこのポメラニアンの事で何か」
柏崎　「預けてから何日も経つから、うちの子たちの具合でも悪くなったんじゃないだろうか。案内してくれ」
メイド「はい」

紗幕戸を開けると、神楽が腰掛け待っている。
そこへ、入って行く、二人。メイドは紗幕戸を動かしながら捌けていく。

神楽　「（立ち上がり）どうも初めまして」
柏崎　「あ、どうも先生。うちの子たちの事でしょうか？」
神楽　「！！…そうですよ。よくお察しで」
柏崎　「やっぱり」
神楽　「お子さんのことで色々とお聞きしたくて。一緒に住んでいらっしゃるんですか？」
柏崎　「最近は別荘の方が長くて、向こうに連れて行って、自分だけこっちに来てるんですよ、まあ、それで…」
神楽　「お子さんは、ご子息？」
柏崎　「両方とも女の子です」
神楽　「あ、女の子ですか…。もう成人されていらっしゃいますよね？」
柏崎　「そうですね。私たちに例えたら、大人ですね」
神楽　「やはり…」
柏崎　「ところで、今日いらっしゃったのは、うちの子の体調が悪いからでしょうか？」
神楽　「何か気になる事でも？」
柏崎　「はい。ウンコが柔らかかったんで」
神楽　「そんなこと確認されるんですか」
柏崎　「ええ。だって、目の前でウンコしますから」
神楽　「目の前で！？」
柏崎　「普通の事でしょ？」
神楽　「大人で、しかも、女性ですよね？」
柏崎　「でも、隠れてはしませんでしょ。ふつう」
神楽　「そう…ですかね…」
柏崎　「確かに…、元気はなかったな」

神楽　「普段と違いましたか？」
柏崎　「いつもは何かあると、必ず飛びついてきて、顔をぺろぺろ舐めてくれるんですけど…」
神楽　「顔を舐めるんですか！？」
柏崎　「普通のことでしょ。　お腹を見せて撫でてくれとせがんだり」
神楽　「お腹を見せて撫でてくれ！？」
柏崎　「普通でしょ？」
神楽　「ですか…ね」
柏崎　「元気がないと言っても、予防接種も打っているから、それほど心配はしていないのですがね」
神楽　「予防接種って、インフルエンザや麻疹とか」
柏崎　「フィラリアやジステンパーだ」
神楽　「なんですか、それ」
柏崎　「病気の定番だろ」
神楽　「いや、そんな事はないと思いますが」
柏崎　「先生ともあろう人が知らないわけがない」
神楽　「あ、ああ、まあ。ジョーダン言っただけですから」
柏崎　「だろ？」
神楽　「ええ。あ、あの…お嬢様のお名前は？」
柏崎　「シンディ」
神楽　「外人みたいですね」
柏崎　「ええ、まあ」
神楽　「例えば、ハーフのようなお顔をされていたり」
柏崎　「ハーフのようなったって、全身毛だらけで分からないでしょう」
神楽　「毛だらけ！？」
柏崎　「そりゃそうでしょう。産まれた時から毛むくじゃらですよ。大人ったってね、こんなサイズですし（手で形つくる）」
神楽　「毛だらけの大人でコレ（小さなサイズ）」
柏崎　「普通でしょ」
神楽　「普通ではないです。ところで、その子のお母様は？」
柏崎　「もう死んだ」
神楽　「やっぱり…」
柏崎　「やっぱりって何だ」

神楽「お聞きしています」
柏崎「そうか」
神楽「その亡くなられた方は、奥様ではなかったわけですよね？」
柏崎「面白い事言うなあ。奥様の訳ないだろう。たかが雌犬に」
神楽「いやいや、そういう云い方は…。お偉い方なのは存じておりますが、そこまで上から目線で、雌犬呼ばわりはどうだろうか！？」
柏崎「分かった分かった。君の立場では、そう思うのか」
神楽「私の立場じゃなくても…思われると…。ところで、お子様は、所謂、隠し子…ですよね？」
柏崎「隠してないよ、なんにも」
神楽「他にお子さんは？」
柏崎「えっと（指で数え）…、これだけいる（6本指）」
神楽「そんなに！？　六つ子？　珍しいですね」
柏崎「珍しいことじゃないぞ。一度にぼろぼろ産まれるんだから。そのためにオッパイが6つ付いてるんだ」
神楽「オッパイ6つ！？」
柏崎「なんで驚くんだ？　あれは6つだぞ。君ならいつも見てるだろ」
神楽「見たことないです。そんな6つなんて」
柏崎「見ないわけないよ」
神楽「う～ん、そうですかね。…ところで、お子さんのなかに、男の子がいましたよね？」
柏崎「勿論な。それだけ産まれればな。…問題児だったなあ。乱暴でな。すぐ足を上げるし」
神楽「手ではなくて？」
柏崎「足だろ上げるのは」
神楽「乱暴と言ったら。普通は手を上げるんじゃないですか？」
柏崎「いや、足だよ」
神楽「蹴りってことですか」
柏崎「蹴らないよ。放尿だろ」
神楽「放尿！？」
柏崎「普通にマーキングして歩くだろ」
神楽「そんな放尿しながら歩く男なんか見たことない！」
柏崎「あるよ、先生なら」

神楽　「ないないない…、あの…、お子さんの中に、テツヤって子いませんでしたか？」

柏﨑　「テツヤ？　確か、シンディの他は、アリス、ロッキー、ルーク、ラッキー、ポチ」

神楽　「急に、ポチ」

柏崎　「テツヤなんて名前はつけなかったぞ。あ、他は里子に出したからな。貰われてから、名前を変えた可能性はあるけどな」

（SE・ガラスが割れるようなアタック音。照明・音に合わせてカットチェンジ。BGMイン・照明変化）

神楽と柏崎の二人、ストップモーション。

13場　松原宅・内

松原と乃木が紗幕戸を動かし、転換をする（慌ただしく、柏崎邸に乗り込む準備をしている雰囲気で）　紗前の芝居となる。

松原がメルカリの段ボールに入った品物を手にして出て来る。

松原　「届いたぞぉ！」

乃木　「来ましたか！？」

松原はダンボールの封を開けている。

乃木　「鑑定書は自信作ですよ（見せながら）　透かしまでこだわりましたから。本物と寸分変わらぬ出来です」

松原　「（箱から陶芸品を出す）おお～、すごいな」

乃木　「これ、本物じゃないですか？」

松原　「バカ！　北大路羅人山の陶芸品が、メルカリで買えるわけないだろ」

乃木　「分からないですよ。贋作だと思って他人にあげたら本物だったなんて話、結構ありますからね」

松原　「どちらにせよ、俺たちは これを本物だと思って、柏崎龍三に高額で売りつける」

乃木　「はい」

１４場　喫茶店・内

ＢＧＭイン・照明チェンジ
乃木、松原と神楽、玲那、後藤田が紗幕戸を転換する（喫茶店の形にする）
先に神楽が座っている。離れて玲那がサングラス姿で 遠巻きに様子を見るように座っている。

後藤田が急ぎ足で入ってくる。
その姿を見つけ、神楽は話をしたくて仕方ない様子で、後藤田を呼び込む。

神楽　「ちょっとちょっと後藤田君、君の両親、人間じゃないだろ？ 何処かの惑星から来てるだろ？」
後藤田「え？」
神楽　「お母さんのオッパイは６つある」
後藤田「６つ！？」
神楽　「お父さんはホクロと乳首が取り外し自由」
後藤田「はあ！？」
神楽　「娘はこんな大きさで毛むくじゃら。成人過ぎてるのに親の前で糞尿をしまくる。これはもう、人間界の話じゃないぞ」
後藤田「そんな話を本当にしてたんですか？」
神楽　「嘘ついたって、何の特にもならないだろ。それにしても、横柄な男で女性をメス呼ばわりだよ。顔をベロベロ舐めたり、お腹見せて撫させりゃ機嫌よくなるって言ってたけど、出来るか、そんなこと！」
後藤田「そんな…」
神楽　「お母さんは死んだって言ってた。子供が６人いて、名前が シンディ、アリス、ロッキー、ルーク、ラッキー、ポチのうちの何れかが、君」
後藤田「哲也は！？」
神楽　「１人を残して里子に出したそうだから、そこで名前を付けたんじゃないかって」

後藤田「…そうなんですか…」
神楽　「慰謝料を請求するなら、作戦をしっかり立てないと、かなり手強いぞ。俺も考えて、また連絡する」

神楽は捌ける。
後方にいた玲那が後藤田に近付く

玲那　「全部聞いてた。そんな人いるのぉ！？」
後藤田「俺も行けば良かったよ。なんで止めたの」
玲那　「いきなりお父さんに会わない方がいいと思ったから」
後藤田「こんな人なら、会わなくて正解だった」
玲那　「6人のうち、哲也はいるのかしら」
後藤田「シンディ、アリス、ロッキー、ルーク、ラッキー、ポチのうちのどれか」
玲那　「ロッキーかルークじゃない？」
後藤田「だよな！だよな！だよな！ 絶対にポチじゃないよな。ポチだけは絶対に嫌だ」
玲那　「里子に出したんなら、その人がお母さんなんじゃない？」
後藤田「そうあって欲しいよ。乳が6つもある母親なんて嫌だ。そんな父親なんて、もっと嫌だ。もうこの話は無かったことでいいんじゃないか」
玲那　「慰謝料をちゃんと取ってくるんでしょ？
後藤田「…うん」
玲那　「逆に良かったんじゃない？ 良い人より後ろめたさは無くなるでしょ」
後藤田「そうだな」
玲那　「神楽をギャフンと言わせてよ、絶対に」
後藤田「大丈夫だ。金だけ巻き上げたらトンズラ。全部あの男のせいにする」
玲那　「頼むわよ」

15場　柏崎邸・内

BGMイン・照明チェンジ
玲那、後藤田、メイド、（松原、乃木）で転換。松原と乃木がいる。

メイド「こちらでございます。お電話を頂いてから、ずっとお待ちになっておりました」
松原　「お忙しいところ、申し訳御座いません」
メイド「前もって、お伝えしておきますが、先生、最近ちょっとおかしいんですよ」
松原　「おかしいとは？」
メイド「大変な甘えん坊さんで、首は一回転しますし、ホクロと乳首が取り外し自由になったんです」
松原　「なんですか、それ」
メイド「少々お待ちくださいませ」

メイドは捌ける。

乃木　「ほら、人間界の話じゃないでしょ？」
松原　「どんな人が来るんだよ」

柏原が現れる。

柏原　「お待たせしました」
松原　「これはこれはお忙しいところ恐縮です。（頭を上げ、柏原の顔を見ると）あ…」
柏原　「？何か？」
松原　「お写真を拝見しましたが、今は ホクロを取っていらっしゃる」
柏原　「ああ、これね。そうなんですよ」
松原　「すみません。ちょっと確認したい事がございまして…」
柏原　「ええ。何でしょう」
松原　「失礼します（真剣な顔で、柏原の胸を探すように撫で始める）」
柏原　「・・・・」
松原　「（胸から手を離して）よし」
柏原　「何がやりたいんです」
松原　「ここも取っていらっしゃるかと思いまして」
柏原　「何しに来たんだ」

松原　「申し訳ございません」
柏原　「何か、陶芸品をお持ちだとか」
松原　「はい。先生が陶芸品収集がご趣味とお聞きしたものですから、厚かましいとは思いましたが、見て頂きたい品がございまして…」
乃木　「北大路羅人山の作品です」
柏原　「ほう」

乃木が箱から陶芸品を出し、見せる。

乃木　「こちらでございます」
柏原　「見たことあるぞ」
松原　「そりゃそうでしょう。北大路羅人山の作品ですから」
柏原　「値段は３０万円でしょ」
松原　「いえいえいえ、何を仰るんです」
乃木　「こちらは三千万円の代物ですよ（鑑定書を見せ）」
柏原　「３０万円で買ったでしょ。しかも、メルカリで」

乃木と柏原は動揺する。

松原　「な、何を仰るんですか。そんな訳は…」
柏原　「私の目を侮っちゃいけませんよ。分かるんですよ。３０万の価値しかない陶芸品なことくらい」
乃木　「・・・・すみません…」
松原　「お前！」
乃木　「だって…」
松原　「（観念して）柏原さん、申しわけない。嘘ついてました。お許しください」
柏原　「謝らなくたって、別にいいよ。どうって事じゃない」
松原　「え…」
柏原　「そこまでして、お金が欲しかったわけでしょ？」
松原　「あ、ええ、まあ」
柏原　「いい話があるぞ」
松原　「え？」

柏原　「この家、買わないか？」
乃木　「買う？…」
松原　「この豪邸をですか？」
柏原　「そうだ」
松原、乃木「（それぞれが）無理、無理、無理」
松原　「とてもじゃありませんが、そんな大金持っちゃいませんよ」
柏原　「最後まで話を聞きなさい」
松原、乃木「・・・」
柏原　「普通なら１０億はくだらないが、５０００万でどうだ？」
松原　「え？　五千…」
柏原　「しかも、陶芸品も全て付ける。北大路羅人山の陶芸品ばかりだ」
乃木　「ここを売ってしまったら、柏崎さんはどちらにお住まいに？」
柏原　「俺は別荘があるから、そこでいいんだ」
松原　「本当に５０００万でいいなら、何とか」
乃木　「松原さん！」
松原　「どう考えてもお得だろ」
乃木　「そうですけど…」
柏原　「だから、いい話と言ったんだ。５０００万でいいので、手付金で一億用意してくれ」
松原　「はい、一お、一億～！」
乃木　「手付金の方が高いです」
柏原　「引っ掛かんなかったか。ジョーダンだよ」
松原　「ですよね。アハハハハ」
柏原　「ハハハ。（視線の先に柏崎の姿を見つける）。失礼。ちょっと席を外す」

柏原、逃げるように捌ける。

乃木　「いいんですか？　５０００万も」
柏原　「陶芸品も付いて、ここが５０００万だぞ。どれだけ高く売れると思ってる？」
乃木　「気前が良過ぎやしませんか？」
柏崎　「相手は大金持ちだ。気前がいいに決まってるだろ」

乃木　「まあ、確かにそうですね」
松原　「こんないい話はないぞ」
乃木　「そうですね」

二人は大喜び。
そこへ、柏崎が反対から現れる。
柏崎は、床にあった陶芸品を手にしながらー、

柏崎　「探してたんだよ。君たちが見つけてくれたのか」
松原　「（柏崎の言葉など聞こえないほど喜んでいる）買います！」
柏崎　「…ん？」
乃木　「買わせて頂きます」
柏崎　「（てっきり陶芸品のことかと思い壺を見ながら）買ってくれんの？」
松原　「勿論ですとも！」
柏崎　「初めて言われた」
松原　「５０００万、払いますとも」
柏崎　「５０００万？」
松原　「はい」
柏崎　「５０００円じゃなくて？」
松原　「冗談ばかり仰って」
柏崎　「有名な人が造ったわけじゃなんだぞ。全部私が造ったんだ（陶芸品を見ながら）」
松原　「これを一人で造ったんですか？（天井などを見ながら）」
柏崎　「材料費でいったら、１０００円もいってないんじゃないか」
乃木　「そんなんで造れちゃうんですか？」
松原　「そんなわけないだろ。千でも万が付くんだよ。謙遜されているんだ」
柏崎　「いやいや、やはりそんな値段では売れません。材料が１０００ですから…せいぜい…」
松原　「分かりました。俺も腹を決めました！　これだけ出しましょう（指八本を出す）」
柏崎　「８０００…」

そこへ、メイドが訪れる。

メイド「先生、お客様が」
柏崎　「誰だ？」
メイド「女性の方が…。何か、重大なお話があると…」
柏崎　「なんだ？…。（松原たちに）ちょっと席を外す」

柏崎とメイドは玄関方面へ。

乃木　「確かに８０００万でも、ここだと完全に儲けが出ますね」
松原　「だろ？　これに北大路羅人山の陶芸品が山ほどあるんだよ。結果的に…」

柏原が突然現れる。

柏原　「結果的に素晴らしい展開です！」
松原　「５０００万では安いと思っていました」
柏原　「お心遣いに感謝します。急いで、８０００万円を用立てて貰えませんかね？」
乃木　「急がないといけませんか」
柏原　「そうなんですよ。安く提示しているので、ライバルが多いもので、早い者勝ちなんですよ」
松原　「それじゃあ、うかうかしていられない」
柏原　「急いで今日中にお願いいたします」
乃木　「振込ですか？」
松原　「いや、現金でお願いいたします」
柏原　「！…」

気配を感じ、柏原はー。

柏原　「ちょっと失礼（捌ける）」

メイドが来てー、

メイド「来客なので別の部屋で待っていて欲しいとのことです」
松原　「あ、はい」
メイド「どうぞ、こちらで」

メイドが案内をして、松原たちを連れて行く。
サングラス姿の小堺玲那が現れ、椅子に座り足を組む。凛とする振舞い。
そこへ、柏崎がやって来て（手に珈琲カップを持ち）、椅子を出し、座る。

柏崎　「さて…重大な要件とは？」
玲那　「・・・・」

玲奈が柏崎に近寄り、ジーっとホクロを見て、引っ張ろうとする。

柏崎　「・・・・（無表情で引っ張られる）」
玲那　「（引っ張り終わると）チッ…（舌打ち）」
柏崎　「・・・・」

今度は後ろから、柏崎の両胸にサッと手をやり、乳首を引っ張る。

柏崎　「（表情は変えないが、軽く反応する）あ・・・」
玲那　「（止め）・・チッ（舌打ち）」

玲那、凛とした振る舞いで椅子に座る。

玲那　「話と違う」
柏崎　「何がだよ！」
玲那　「取り外し自由を体験したかった」
柏崎　「最近、頻繁に乳を弄られるんだが、なんなんだ、これは。
流行ってるのか？」
玲那　「それは、あなただからよ」
柏崎　「意味が全く分からないよ。君は何だ、売春婦か？」
玲那　「わたしよ、分からない？」
柏崎　「分かってたら、とっくに打ち解けてるだろ」

玲那　「この名前に覚えはない？　アリス」
柏崎　「アリス？」
玲那　「そう」
柏崎　「谷村新司とか」
玲那　「そっちじゃなくて。私が誰か分かるでしょ？」
柏崎　「分からないから、これだけ問答してるんだ」
玲那　「貴方に捨てられたのよ」
柏崎　「捨てられた？」
玲那　「ルークやロッキーやラッキーと共に、貴方に捨てられた女よ」
柏崎　「は？」
玲那　「酷い人ね。覚えてないの？　アリス」
柏崎　「君はあれか、雌犬か？」
玲那　「来た来た来た来たぁ！！　必殺、上から目線」
柏崎　「だから、全く意味が分からないんだよ」
玲那　「本当に横柄な男ね」
柏崎　「突然訪ねてきて、訳の分からない事を言いまくってる君の方が、余程横柄だろ」
玲那　「（独り言）ホント、手強い…」
柏崎　「何が目的だ？」
玲那　「目的？　アハハハハハハ…（気の利いた事が思い浮かばず、沈黙）」
柏崎　「―間―　だから、なんだよ！」
玲那　「・・・・・」

玲那は展開に困って、おもむろに柏崎に近付き、顔を掴み（実際は振りですが）ベロベロと高速で舐めまくる。

柏崎　「ちょ、ちょ、な、何してるんだ!?　止めろって！」
玲那　「・・・」

玲那は離れるが、やはり展開に困り、お腹を見せー、

玲那　「ほら、撫でなさい！　思う存分、撫でなさい！」
柏崎　「？・・・」

玲那、横になり、同じくー、

玲那　「ほら、撫でるのよ！　私の腹を思い残すことなく撫でなさい！　さあ！」

柏崎　「さあ、じゃないよ！　見知らぬ女の腹をいきなり撫でる奴がいるか？　やっぱり君は売春婦だろ！？」

玲那　「違うわよ！」

柏崎　「じゃあ、何なんだ、君は！」

玲那　「私は…」

柏崎　「…君は？」

玲那　「…物心がついた時、私に父親はいなかったんです。最初のお母さんの顔も思い出せず、二人目の母には執拗に虐待を繰り返されました。それを見かねた近所に住んでいた叔母さまが私を救ってくれました。私が三人目の母と呼ぶその方との暮らしに初めて幸せを感じましたが、程なくして病に伏し、亡くなってしまったんです。以来、孤児院で育てられました。そこで、ずっと私の本当の父親は誰かを思うようになったのです。ずっとずっと捜し続けて、そしてついに…」

柏崎　「・・・（珈琲を口にし）」

玲那　「お父さん、逢いたかった！」

柏崎　「（口に含んだものを全て吹き出す）！！」

玲那　「（それを全て浴びる）・・・」

柏崎　「…はあ～!?」

玲那　「もし、貴方に捨てられてなかったら、私はきっとこんな大きなお屋敷に住み、ずっと幸せな日々を送ることが出来たでしょう。お父さん、少なくとも、私の失った２０年間という日々を償ってもらえませんか？　せめてお金ででも…」

柏崎　「・・・」

玲那　「・・・」

柏崎の返事がないので、近付き、また顔をベロベロと舐め始める。

柏崎　「いいから、それは」

玲那　「・・・（今度はお腹を見せると）…さあ」
柏崎　「もういいから、それも。幾ら欲しいんだ？」
玲那　「…一千万」
柏崎　「ちょっと高いな。一００万なら払おう」
玲那　「娘がこんなに頼んでいるのに」
柏崎　「残念だが、君のような娘はいない。それには確証がある。あえて言わんがな。君の一生懸命さに払うんだ。一００万だって、大金だぞ。持ってくるから、ちょっと待っていなさい」

柏崎はお金を取りに行く。
一００万円は不満そうな顔をしていたが、柏崎が見えなくなるとガッツポーズでピョンピョン嬉しくて飛び跳ねている。

（ＢＧＭイン・照明変化）

16　柏崎邸・別室

メイドが紗幕戸を動かし、別室の形をつくる。
松原と乃木が現れる。既に、ウロウロして、待機している様子。
そこへ、メイドが後藤田と神楽を連れて来る。

メイド「こちらの部屋でお待ちください」
後藤田「ありがとうございます」

メイドは案内をして去って行く。
乃木が神楽の姿を見た瞬間、慌てて松原の顔を胸に埋め抱きつく。

松原　「うぐっ、な、なに？」
乃木　「（小さい声で）例の男ですよ」
松原　「！…」

乃木はバレないように、強く抱き締めている。

神楽と後藤田は、その姿を見て、固まるー、

後藤田「・・・・」
神楽　「・・・こんなとこで…ん？（乃木の顔をジッと見て、見た顔だと）」
乃木　「（目を瞑っていたが開き、神楽と目が合い）あ、ご無沙汰しております」
神楽　「だよね、あの時の」
後藤田「知り合い？」
神楽　「まあ、そうなのよ」
乃木　「あ、お巡りさん」
後藤田「お巡りさん⁉」
神楽　「そう。何でもやらないと食っていけないから」
乃木　「連行された募金箱、どうなってますか？」
神楽　「そんな心配するより、他人の家で、そんな事している自分たちを心配しろ」
乃木　「あ、これはですね…」
神楽　「いいのいいの、色んな趣味があっていいの、人間は」

すると、玲奈が現れる。

玲那　「あれ？」

その声に神楽と後藤田は玲奈を見る。後藤田も来ているとは知らずに驚くが、絶対に会いたくない神楽は、後藤田に抱きつき顔を見せない。

メイドが再登場する。これらの姿を見てー、

メイド「ー！…（固まる）」
後藤田「（玲奈に。声に出来ずにウイスパー）何で来ているの？」
玲那　「（悪戯っぽく微笑み、人差し指を口に当て）シー」
後藤田「（再びウイスパーで、玲奈に合図を送る）向こう行って、向こう」

玲那、別の部屋に向かう。

後藤田「（神楽に）どうしました？　神楽さん」
神楽　「若い女がいるだろ？」
後藤田「もういませんよ」
神楽　「いない？」

神楽は顔を上げ、周囲を確認しホッとする。

神楽　「はあ、良かった」

すると、突然、玲奈が現れー、

玲那　「こっちじゃなかった。向こうだった」
神楽　「ー！」

玲那の再来に驚き、慌ててメイドに抱きついて顔を隠す。

メイド「えー…な、な、なんです」
神楽　「おおメイド、おまえはどうしてメイドなの、ああ愛しきメイドよ」
メイド「そんな、お止めになって、ああ～」

すると、柏崎が現れる。一度、メイドと神楽の横を通り過ぎるが、神楽たちを二度見して驚く。

柏崎　「ー！…」
後藤田「（慌てて・柏崎に）何でもありません。何でも（神楽たちを押していく）」
柏崎　「ひ、ひ、平盛君、君は…」
メイド「（恍惚の表情で）せ、先生～、私、私～」

後藤田はとにかくこの場から脱しようと、無理矢理に連れて行く。
玲那がいる。柏崎は彼女を見つけー、

柏崎　「あ、君を探してたんだ。これ、これ（お金の入った封筒を渡す）」
玲那　「ああ（封書の中身を見て）ありがとうございます！！」
柏崎　「今日は、なんだか可笑しな日だ。いつもはこんなんじゃないんだぞ」
玲那　「私もきっと、その可笑しな一人でしょ？」
柏崎　「充分そうだ。私の気が変わらないうちに、早く帰りなさい」
玲那　「はーい！　ありがとう、先生！」

ウキウキで去って行く。

柏崎　「（ホッと）・・・」

なんとなく振り返ると、乃木と松原が、まだ怪しい形で抱き合っている。

柏崎　「！！…（リアクション後に目を背ける）」
松原たち「・・・」
柏崎　「早く済ませてくれないか」
乃木　「あ、違うんです」
柏崎　「他人の家でそれは…」
松原たち「（それぞれ）違うんです。全然違うんです」
柏崎　「違うも何も、抱き合ってんだから、そういう事だろう」
松原たち「（それぞれ）違うんですよ。だから違うんです」
柏崎　「もう離れてもいいんじゃないか」
松原　「これにはちょっと訳（顔を上げると、もう神楽がいない事に気付き）あれ、もういないじゃないか。離れろよ、気持ち悪い」
乃木　「兄貴のピンチを救ったんですよ」
松原　「すみません、先生。あの、お支払の件ですが、今日じゃないといけませんか？」
柏崎　「いつでもいいぞ」
松原たち「（それぞれ）本当ですか⁉」
柏崎　「そんな８０００くらいでジタバタするわけないだろう」
乃木　「助かります」
松原　「ありがとうございます」

髪の毛が乱れ、息の荒いメイドが現れる。

メイド「（息が荒い）ハァハァお客様がハァ話をしたいハァハァそうです」
柏崎　「お前、そのお客様となんかあったろ」
メイド「想像されているような事はありません」
柏崎　「何だろうな、今日は」

柏崎は、そう言いながら他の部屋へー。

メイド「・・・・」
乃木　「どうしました？」
メイド「（興奮して）あ、あ、あんなに激しく抱きつかれたの、初めてだったのでー」

メイドは興奮しながら捌けていく。

松原　「柏崎龍三は流石だな。金持ちは器がでかい」
乃木　「今日中の用意じゃなくて良かったですね」

そこへ、柏原龍二が入って来る。

乃木　「あれ、先生。もうお話が終わったんですか？」
柏原　「何が？」
松原　「先生、本当に助かりました。正直、今日の支払いだと厳しかったんですよ」
柏原　「今日、払ってよ」
松原　「ありがとうございます。今日払っ…今日払う⁉」
乃木　「先生、すみません。今しがた、いつでもいいと」
柏原　「言ってないよ」
松原　「お心の広い先生だと思っていたのに…」
柏原　「心が狭くても小さくてもいいんだけど、今日中に頼む」
松原　「先生、ほんの数日でいいので、待って頂けませんか」、
柏原　「待てないよ。とにかく、続きは他で話そう。ここは良く通るんだ」

松原　「誰がですか？」
柏原　「いいから、こっちこっち」

紗幕戸を移動しながら、松原たちは捌ける。
（ＢＧＭイン・照明変化）

１７　柏原邸・応接間

神楽と後藤田がいる。

神楽　「どうしても会いたくない女なんだよ」
後藤田「そうなんですか」
神楽　「なんであの女が、ここにいるんだ」
後藤田「なんででしょうね」
神楽　「それよりも、とにかく手強いからな。あの柏崎龍三は。人間と話していると思っちゃいけないぞ。独特な世界を持ってるから」
後藤田「僕らがその世界に合わせないといけないですね」
神楽　「上手く話しに乗っかって、何とか成立させよう」
後藤田「ところで、今日の設定は、弁護士の先生ですよね？」
神楽　「設定言うな、設定」

そこへ、柏崎龍三がやってくる。神楽の姿を見つけー、

柏崎　「あ、先生でしたか」
神楽　「これはどうも。先日はありがとうございました」
柏崎　「先生がいらしたという事は、やはり調子が悪いんですね、シンディの」
神楽　「いえいえ、シンディではなく、今日は別の子の事で」
柏崎　「別の？」
神楽　「はい。彼（後藤田）です」
柏崎　「貴方のところも？」
後藤田「はい」
柏崎　「予防接種は打ってますか？」

後藤田「よ、予防接種ですか？」
柏崎　「ジステンパーとか」
後藤田「ジステンパー!?」
神楽　「ほら、あれだよ、あれ。今月がMarchだろ？　ジステンパーって、あれ、１２月」
後藤田「１２月！　はい、１２月です」
柏崎　「そうか、１２月に打ったんだ。じゃあ大丈夫だな」
後藤田「はい。大丈夫です。アハハ」
神楽　「ハハハ…（間）」
柏崎　「え、待ってよ。じゃあ、いつ具合が悪かったんだよ？」
後藤田「具合が悪いと言われましたら…産まれてからずっと、気分は悪いです」
柏崎　「でも、最近は元気なんだろ？　注射も打ってるし」
後藤田「でも、悩みは尽きませんね」
柏崎　「先生に、ちゃんと相談してるのか？」
後藤田「勿論です。特に血筋の問題とかで…。それで、今日もこちらにお邪魔させて頂きました（いよいよ本題に入ろうとシリアスに）」
柏崎　「ああ、そういう事か…。血統書な」
神楽　「実際にそういう書面は残されてはいないのですが…」
柏崎　「一つだけ方法はあるぞ。うちの娘のシンディはな、立派な血筋なんだ」
神楽　「それはわかりますよ、なあ」
後藤田「もちろん、当然理解しております」
柏崎　「手っ取り早く、シンディと掛かるか？」
後藤田「はい？　掛かるとは？」
柏崎　「分からないか？　ドッキングだよ」
神楽　「もっと分かりません」
柏崎　「何言ってんだよ。ドッキングったら、これしかないだろう（両手を開き、指を曲げたり伸ばしたり、性交渉を意味する）」
神楽、後藤田「ええ～!?」
柏崎　「そうすれば、君のところと血は繋がって、血統の書面も届くだろ？」
神楽　「すみません。余りにも突拍子もない提案で、どうリアクションしていいか」
柏崎　「普通だろ。血筋で悩んでるなら、これが一番手っ取り早いだろ」

神楽　「いやいや。娘さんと彼がそんな事出来るわけないじゃないですか。血が繋がってるんですよ」
柏崎　「血を繋げたいんだろ？」
神楽　「いやいや、もう繋がってるんです」
柏崎　「繋げないと繋がらないだろ、こういうものは」
神楽　「とにかく、余計に彼は悩むことになりますから」
柏崎　「悩むことは無い。これでスッキリするはずだ」
後藤田「申し訳ないんですが、僕はずっと悩んできたんです。貴方のせいで」
柏崎　「なんで私のせいなんだ⁉　関係ないだろ。君のとこの血統書とは」
後藤田「アリス、ロッキー、ルーク、ラッキー、ポチのどれかなんです！」
柏崎　「・・・え？」
後藤田「だから、アリス、ロッキー、ルーク、ラッキー、ポチのどれかなんです！」
柏﨑　「・・・何が？」
後藤田「だから、アリス、ロッキー、ルーク、ラッキー、ポチのうちのどれかが僕なんです！」
柏﨑　「・・・はあ？」
後藤田「はあ、じゃなくて！…とにかく、頼むからポチじゃないって言って下さい！」
柏崎　「ポチじゃない…言ったぞ」
後藤田「ああ、良かったぁ」
神楽　「よくないだろ。いいですか、つまりですね。子供かどうかってことなんですよ」
柏崎　「ああ、そうか。どの子も譲ってからの後は知らないからな。何処でどう血を繋げていっているかは分からない。もしそちらの子が、本当に、うちのと血が繋がっているというなら、血統の書面はすぐ作れるだろ」
神楽　「実は書面なんかどうでもいいんです。一番欲しいのは、なあ」
後藤田「こっちで（神楽と共に指で輪っかを創り、お金を示す）」
柏崎　「ああ、それでいいの？」
神楽　「それ以外は、特に興味がありません」
柏崎　「幾つ欲しいんだ？」
神楽　「単刀直入に申しますと、これくらい（両手で１０本）」

柏﨑　「１０本。そんなにはないなあ。（指三本出し）これなら直ぐ渡せるぞ。
　最終的に（両手で一〇本）これは用意出来るがな」
神楽　「最終的に渡して頂けるなら、先ずはコレ（三本）で結構です。それで、
　誓約書でいいので、書いて貰えないでしょうか」
柏崎　「いらないだろう、そんなもん」
神楽　「信用していないわけではございませんが、一応、お約束を忘れないよう
　に」
柏崎　「大げさだな。分かった分かった、向こうの部屋で待っていてくれ（指で
　指し示し）」

神楽と後藤田は言われた通り、奥の部屋に向かう。

柏崎　「平盛君、平盛君」
メイド「（現れ）はい。先生」
柏崎　「これ（指で輪っか）を3本持って来てくれ」
メイド「かしこまりました」

メイドが去り始めると、反対から松原と乃木が入って来る。
近くで柏原と話をしていた雰囲気で。

松原　「柏崎さん、何としても、今日中にはお支払いたしますので」
乃木　「全力で用意致します」
松原　「それでは先生、こちらで失礼致します」

出捌け口に向かって話してしていた（その先に柏原がいる体で）
振り返ると、柏崎が立っているので、相当に驚く。

松原、乃木「ウワッ！」

ひっくり返るほどの驚き。

松原　「え？…」
乃木　「今、今、今（来た方を指差している）」

松原たち、今しがたいた部屋を覗いたり、戻ったり。

松原　「今、喋ってたじゃないですか⁉」
乃木　「どうやったんですか⁉」
松原　「ホクロもあっという間に付けて」
乃木　「マジシャンみたいですね。どんなトリックなんですか⁉」
柏崎　「何言ってるんだ、君たちは」
松原　「先生、とにかく今日中に払いますから」
柏崎　「まだ言ってるの？　いいよ別に、いつでも」
松原　「今、あれだけ直ぐ払えって言ってたじゃないですか⁉」
柏崎　「いつ？」
松原　「今ですよ」
柏崎　「言ってないよ、そんなこと」
松原、乃木「はぁ～⁉」
乃木　「とにかくお約束通り、金融機関で借りて、先生の方にお渡ししますから」
柏崎　「そんな借りるような額じゃないだろ」
松原　「先生とは金銭感覚が違うんですよ」
柏崎　「だって、８０００だろ？」
乃木　「大金ですよ」
柏崎　「そのくらい財布に入ってないのか⁉」
松原、乃木「無理でしょう！」
乃木　「破裂しちゃいますよ、財布が」
松原　「先生の財布、キャリーバックとかですか？」
柏崎　「それは財布とは言わないだろ」
乃木　「８０００が入る財布って…」
柏崎　「全部１円玉で揃えたら、財布も破裂するだろうけど」
乃木　「１円、それだけ揃える方が大変ですって」
松原　「もう１円や財布のハナシはどうでもいいですから、今日中にお支払いいたします」
柏崎　「だから、いいって」
乃木　「先生、もしかしたら、お気が変わられたって事はないですよね？」

柏崎　「変わってないよ。私のお手製を買ってくれるっていうんだから、嬉しい限りだ。ただ、支払いなんかは、いつでもいいんだって」
松原　「いやいや今日中に絶対にお支払い致します」
柏崎　「君たちも頑固だな。後でいいって言ってるんだから、後だっていいだろ」
松原　「絶対に今日、お支払します。気が変わられたら嫌なので」
柏崎　「私も意地になってきた。…絶対に今日は受け取らないぞ!!」
乃木　「ちょっと待って下さい。どうしてそうなるんですか？」
柏崎　「そこまで言われると、私も意固地になるんで」
松原　「頑固じじい」
柏崎　「頑固じじい？」
松原　「ウソです。かっちょいい　って言ったんです」
柏崎　「絶対に受け取らない」
松原　「もう、どんなことあっても今日必ず私が持参します」
柏崎　「あのな、じゃあ、払ってもいいけど、こっちの若い彼に持って来てもらってくれ」
松原　「なんでです？」
柏崎　「君は生理的に合わん」
松原　「ウワッ、最終兵器みたいな一言頂きました」
柏崎　「（乃木）君、後で別荘の方に持って来てくれ」
乃木　「別荘？　どちらに？」
柏崎　「宮古島」
乃木　「遠すぎます！」
柏崎　「嫌なのか？」
乃木　「嫌ではないですけど…」
松原　「とにかく誓約書を作りますから、ちゃんと約束を書面に…」
柏崎　「もう、勝手にしてくれ」

柏崎は歩いて行く。

松原　「誓約書も作りますからね。お願いします」

柏崎とは別方向に、松原たちは去る。

メイドが出て来る。
血相を書いてメイドを追う、神楽と後藤田。

神楽　「ちょっちょっちょっと！　これは何ですか、これは」

後藤田が2つ、神楽が一つ、犬の首輪を手にしている。

メイド「犬の首輪」
後藤田「見ればわかりますよ」
メイド「先生に渡せって言われたんですよ」
後藤田「首輪を!?」
メイド「はい」
神楽　「私たちは金銭を要求したんです。こうやって（指に輪を作り）ハッキリと、お金って」
メイド「ああ～、それで」
後藤田「どうしました？」
メイド「うちでは、これ（指で輪っか）、首輪のことなんです」
神楽、後藤田「嘘ぉぉぉ！」
神楽　「先生に至急会わせて、先生に。会わせ…」

そこに玲奈が現れる。
神楽、玲奈を見るなり、いきなりメイドに抱きつく。

メイド「いやん、又～！」
神楽　「逢いたかった。君に逢いたかったんだ」

なんてことを言いながら、神楽が抱きついたまま捌けていく。
玲那と後藤田―。

後藤田「（周囲を気にしてから）何でここにいるんだよ」
玲那　「ちゃんとあの男を懲らしめているか様子を見に来たの」
後藤田「心配すんなって。計画通りだ。他人の家にウロウロしてちゃ、逆に怪し

まれるだろ」
玲那　「部屋が沢山あって、殆ど人に会わないよ。また探索してこうっと」
後藤田「何処かでジッとしてて」
玲那　「うん」

玲那が捌け、後藤田は神楽が捌けた方角へ向かう。

誰もいなくなった部屋に柏原が現れる。キョロキョロと周囲を警戒している。
そこへ、松原たちが現れる。

松原　「あ、先生！」
乃木　「あんなこと言ってすみません。　別荘行きますから」
松原　「考えたら、何日かあった方がお金も揃えやすいですし」
乃木　「誓約書も1か月の猶予を設けさせて頂きました」
柏原　「ダメだよ。今日中に払って貰わなきゃ」
松原、乃木「…（間）…、ええええええ!?」
柏原　「誓約書も今日中に支払うと書き直してくれよ」
乃木　「今しがた、あの、僕にお金を運んでくれと仰られて…」
柏原　「俺が言ったの？　そう俺が言ったのか？」
松原　「覚えてらっしゃらないんですか？」
柏原　「じゃあ…、そうしてくれ。兎に角、今日だぞ、今日。頼んだぞ」

柏原は人の気配を感じ、そそくさと去る。

松原　「なんなんだよ、あの爺さんは」
乃木　「誓約書を書き直さなくてはいけませんね」
松原　「ああ、もう、こんなもん！！」

誓約書をビリビリに破いてしまう。
今度は柏崎龍三が現れる。

柏崎　「まだ居たのか、君たちは。（千切れた誓約書に触れ）何をしているんだ？」
松原　「（千切れた紙片を拾いながら）先生、書き直しますからね、ちゃんと。今日中に間違いなく支払うことを」
柏崎　「頑固なオッサンだな。今日は支払わなくていいって言っただろ」
松原、乃木「・・・・・（間）」
柏崎　「（固まっている二人を見て）ん？　どうした？」
松原　「あ…あ…あ…、あああああああああ！！！！！」

拾っていた紙片を叩きつけたり、投げたり、怒り発狂。

乃木　「兄貴、落ち着いて、しっかりして、兄貴～！」

羽交い締めで必死に止める。
そこへ、神楽と後藤田が現れる。柏崎を見つけ―。

後藤田「あ、いた」
神楽　「先生！」
松原　「あああああああ…（神楽を見て）あ！」

松原は神楽を見ると、急に我に返り、神楽とは会いたくないので、傍にいた柏崎の後方から抱きつき、顔を隠す。

柏崎　「な、な、なんだ、おい」
松原　「こっちを向こうとしないで下さい」
柏崎　「急にどうした？」
松原　「（しがみついている両手が丁度柏原の胸部である）先生、そういえば、ここ（クリクリとしている）」
柏崎　「またこれか。今日は何回、乳をまさぐられてるんだ」
松原　「取れるんでしたっけ？（引っ張る）」
柏崎　「痛い痛い痛い…何をするんだ！」

無理やり、松原をひっぺがし、放り投げる。

松原　「ああ～！　あ（神楽と目が合い、直ぐうつ伏せになり顔を隠す）」
乃木　「兄貴、こっちだこっち（逃げ始める）皆様、こちらは余り気にしないで」

松原と乃木は捌ける。

後藤田と神楽と対峙する、柏崎。

柏崎　「まだ居たのか、君たちは。もうあげただろ。これ（指で輪っかを作り）３つ」
後藤田「欲しいのは、それではなく…慰謝料」
柏崎　「医者？　診察代か？」
神楽　「わざと間違えてないですか？」
柏崎　「君はシンディをちゃんと診てくれたのか？　もしそうだとしたら、ちゃんと払おう」
後藤田「・・・」
神楽　「（後藤田に）もう、こうなりゃ、そういう事でもいいんじゃないのか？」
後藤田「いえ」
神楽　「ダメなのか？」
後藤田「どうしても、ハッキリさせたいんです」
神楽　「…分かった」
後藤田「柏崎さん。僕は貴方の息子です」
柏崎　「ん？」
後藤田「そして、母は、貴方が消息を絶った後も、ずっと貴方の事を愛し続け、一緒になりたかった。生涯で唯一愛した男性が貴方だった。それを認めて欲しい」
柏崎　「・・・」
後藤田「母が死ぬ間際のある日、貴方がこの屋敷に入って行く姿を見たんだ。その時、母は初めて貴方と写っている唯一の写真を僕に見せてくれた。
３０年も前の若い顔だけど、ハッキリと認識できた。　貴方だ。そこに写っていたのは、紛れもなく貴方しかいない」

柏崎　「・・・・」
後藤田「お金はいらない」
神楽　「・・・」
後藤田「それを認めてくれるだけでいい…」
柏崎　「…幾ら欲しいんだ？」
神楽　「五千…」
後藤田「金はいらない」
神楽　「ちょっと貰っておこうよ」
柏崎　「金で済むなら、解決してあげるよ」
神楽　「一億」
後藤田「金はいらないっていってるだろ！」
柏崎　「…残念ながら、首を縦には触れない理由があるんだ」
後藤田「・・・」
柏崎　「君のお母さんと私が付き合った事実も、君が私の息子であることも、理由は言えんが、１００パーセント有り得んことなんだ。残念だがな」
後藤田「逃げるのか…」
柏崎　「…逃げるとは、事実に背を向けることだ。事実に対峙している今は、それは相応しくはない。金は要らないというが、最初に君はこうやってみせただろ（指の輪っか）。それが例え一瞬でも、事実を金と引き換えようとした。
その時点で、君は事実に背を向けたことになる。君が責める私と、全く同じことをしたということだ。　同じ穴のムジナだろ」

柏崎、去り始める。

後藤田「おい、待てよ！　逃げるのか⁉…」

後藤田にサス照明。他は暗くなっていく。
紗幕戸が閉まっていき、後方の人たちを隠す。
サスのみで、後藤田一人になる。正面を向き叫び始める。

後藤田「認めてくれるだけでいいんだ！　お金はいらない！　認めてくれよ！
そうじゃなきゃ、母さんが報われないろ！　なあ！」

いつしかＢＧＭが流れ始め高鳴ってゆく。

１８場　柏崎邸・内（時間経過後）

紗幕戸が閉まり、紗後ろにサス照明で玲那の姿―。
紗幕戸が舞台のひし形と同じ形状で閉まっていて、人一人通れるだけの通路に舞台ツラに通っている。
そこに、薄っすらと照明が入る。後藤田は、その通路を使用する動きを。
玲那はサス中で、正面を見据えて、動かずにセリフ。
後藤田は相対して、舞台ツラの通路を動いてセリフ。お互いに顔を合わせては会話をしない。

玲那　「哲也」
後藤田「何？」
玲那　「私がいたって、孤独を感じているでしょ？」
後藤田「…分かるか？」
玲那　「うん」
後藤田「・・・」
玲那　「でもね、哲也。人間、孤独を感じない人なんて、一人もいないんだよ。生れる時も、死ぬときも、誰もがその瞬間は、一人なんだから…」
後藤田「…そうだね」
玲那　「実はね、柏崎さん、もう一度、哲也と話したいって」
後藤田「え？」
玲那　「あれから数時間、いろいろ考えたって。この家も売りに出すらしいよ」
後藤田「会えるのか？」
玲那　「うん。ちょっと待って」

玲那のサスがアウトし、別の個所にサスが入ると、柏原がいる。

柏原　「・・・・・」
後藤田「先程は…失礼いたしました…」

柏原　「いや…、俺もすまなかった」
後藤田「…いいんです」
柏原　「さっきはあんな事を言ったけど、本当は君のお母さんと、お付き合いをさせて頂いていた」
後藤田「…やっぱり…」
柏原　「君がお金の話をしたもんだから、俺もちょっとカチンときてね」
後藤田「…ごめん」
柏原　「…愛していたよ。彼女の事は、本当に愛していたんだ…。ただ、俺はちゃんとした職にも就かず、所謂ニートで、彼女に食べさせてもらっていた。幸せに暮らしていたが、ある時、このまま一緒にいることが、本当に彼女の幸せになるのかと自問自答をし始めたんだ。　俺よりももっと生活力のある男と出逢った方が、彼女は幸せになるんじゃないか…。話し合えば辛くなるだけだと、俺は声も掛けずに姿を消したんだ。
ただ、その時、君を身籠っていたことは一切知らなかったんだ。彼女も生んでいいものか、悩んでいたのかもしれない。
君が俺を責めるのは当たり前だ。だけど、もし俺が居たら、君のお母さんは、君を産むことを拒んだかもしれない。
いや、これは、余りにも自分がしたことを正当化しようとしているな。
すまない。
今思えば、君たち二人を、結果捨てたことと同じ行為をしてしまったことは、心から反省している。　本当に申しわけない（深々頭を下げる）」
後藤田「・・・・・」
柏原　「この家を売ろうと思っている。どんな仕事でも、人生でも、必ず浮き沈みはあるものだ。人生はプラスマイナス・ゼロになる。神様は均等に人を見ているんだよ」

後藤田は、この後、紗幕戸を自分で開け始めて、しっかり父親と対峙しようとする。（それに合わせて、照明が全体に入る）

後藤田「…お金に困ってるのか？」
柏原　「…まあ」
後藤田「この家、売らなくていいよ。取り急ぎ、幾らいるんだ？」

柏原　「お前に貰うわけにはいかないだろう。本来なら、お前の人生に対して、私が償わなければいけないのに…」
後藤田「いいから…幾らいる？」
柏原　「・・・」
後藤田「一００万。取り急ぎ、それでもいいか？」
柏原　「・・・（頷く）」
後藤田「…分かった」
柏原　「…すまない。本当にすまなかった。本当に…」

後藤田の手を握り―。
ＢＧＭアップ、照明フェイドアウト。

１９場　ある街頭・夕方

（街頭のＳＥ，照明イン）
神楽が立っている。そこへ、玲奈が走って来る。
玲那を見て、顔を隠す、神楽。

玲那　「（神楽を見て）誰もいないんだから、もういいでしょ」
神楽　「あ、もうこれ、条件反射だわ」
玲那　「（笑う）ねえ、見て（手にした封筒から）あの作家からだまし取った１００万！」
神楽　「単独行動でよくやった！」
玲那　「きゃあ～！！」

二人、ハグする。その後、神楽はグータッチを求めるが―、

玲那　「ごめん。私、カープファンだから（と拒む）」
神楽　「ここはファン関係ないだろ」
玲那　「丸の恨みは大きいのよ」
神楽　「長野が行ったからいいだろ」
玲那　「そういう問題じゃないから」

すると、柏原が遠くから大声でー。

柏原　「おーい！」
玲那　「リュウさん、来た！」
柏原　「ノギッチもー緒だぞ」
乃木　「イエーイ」

柏原と乃木は８０００万円入ったキャリーバックを転がしながら現れる。

神楽　「来た来た来た～！」
乃木　「８０００万円だ～！」
神楽　「やったね～！！」

乃木とグータッチ。

神楽　「リュウさん！（グータッチを求めるが）」
柏原　「俺、タイガースファンだから」
神楽　「なんだよ、グータッチ付き合える人がいねぇじゃねえか、ほとんど」
柏原　「しかし、今回はダイナミックなヤマだった」
乃木　「玲奈ちゃんが結婚詐欺師に、わざと乗っかってから始まった計画だからね」
玲那　「哲也を騙して、逆にお金を頂戴するだけの計画だったのに、アイツ、親が柏崎龍三かもしれないなんて言い出すから」
神楽　「この壮大な物語に成っちゃったわけですよ」
玲那　「それでまた、泥棒に入ったリュウさんが、柏崎龍三が自分とそっくりだなんて言い出すから、余計に盛り上がっちゃって」
乃木　「名前もそっくりですからね。柏崎龍三と栢原龍二」
柏原　「だけど、こんなにヒヤヒヤしたヤマもあまりないよ」
玲那　「柏崎龍三が帰ってきたのは想定外がだったもんね」
柏原　「最初は後藤田哲也を引っかけて、お金を出させるというだけの計画がね」
乃木　「玲奈ちゃんの機転の利いた采配によって、見事に変貌したから。あの采

配は見事だった」

神楽　「アレね、こうなりゃあ、本物にアタックしようっていうね。
だけど、柏崎と話してたら発狂しかけたけどね。人間界のハナシじゃないから、あれ。まあ、アタックしたおかげで、犬の首輪、1個ゲットしたけど」

一同、笑う。

玲那　「でも私は、１００万」

乃木　「それ、凄いよ」

玲那　「柏崎のおかげで、5千万が8千万になったしね。
リュウさんも結局、哲也から１００万貰ったし、いいことずくめね」

神楽　「俺的には、あの松原のオッサンに復讐出来たから大満足だよ。ノギッチは影のＭＶＰだ」

柏原　「いやぁ、疲れた」

神楽　「哲也と松原がいる場所では、芝居しっぱなしだから。ノギッチとの、あの、最初の募金箱のやり取りなんて、俺、笑いそうになっちゃってもん。哲也がいなかったら、あんな芝居することなかったんだよ」

玲那　「連れてこなかったら、喫茶店で会わせられないじゃない」

神楽　「まあね」

乃木　「さあ、パーッと何処行きますか」

玲那　「ハワイも行きすぎたからね」

神楽　「宮古島」

乃木　「柏崎に会いますよ」

神楽　「それは嫌だな。でも、シンディには会ってみたい。毛むくじゃらのこんな人（サイズを手で表現）」

玲那　「ねーねー、先ず、ゆっくり温泉でも浸かって、そこで考えよう。賛成の人」

柏原以外全員「はーい（手を上げる）」

乃木　「じゃあ、行こう！」

神楽に腕を組む、玲奈。

神楽　「そうだ玲奈、一つだけ聞きたいんだけどさ。お前まさか、あの哲也と、ね、ねね、ねた、寝たの？」
玲那　「さあ～ね。それよりも、ケイちゃん、あのメイドと」
神楽　「寝るわけねぇーだろ！　俺だって選ぶ権利あるわ」

一同、笑う。楽し気に行こうとするとー、

メイド「ちょっと待ったぁ～！」

すごいお粧しをして、花束を持って走って来るメイド。
一同、驚く。

メイド「私も仲間に入れて下さい！」
他一同「え！？」
メイド「先生を騙して、３０万円奪ってトンずらしてきました。これで、全員詐欺師です！」
神楽　「無理やり君まで詐欺師にならなくたっていいんだよ」
メイド「神楽さん！　（組んでいる腕を見て）な、な、何です、これは。そういう関係なんですか？」
神楽　「そう」
メイド「…当たって砕けます！　神楽さん、貴方の熱い抱擁が忘れません。私と付き合って下さい！」
一同　「・・・・」
神楽　「温泉、何処行こうか」

一同、動き出す。柏原だけが動かない

メイド「ええ～…」
柏原　「あの、皆さん」
一同　「？（立ち止まる）」
柏原　「一つだけ、お話したい事が…」
一同　「？」
柏原　「後藤田哲也の父親は…、本当に…自分なんだ。…、彼に伝えた話も、全

て事実。黙っていて、すまなかった。私は詐欺師です。金のためなら温情も捨て、役者に徹する。あいつに後ろめたさは無かったんだが、会ったとたんに湧き上がってきて…。
この、お金…（お金を取り出す）」

（ＢＧＭイン）（照明・ゆっくり変化）

神楽　「返したいんだろ？　行ってきなよ」
柏原　「でも…」
神楽　「俺たちは普段大嘘を付いているんだからさ、こんな時こそ、本当の気持ちに従いなよ」
玲那　「親子なんだから」
乃木　「彼を仲間に入れたっていいんだよ」
神楽　「ここまで長い年月、放っておいたんだから。償いたいんならさ、残りの人生、そんなに長くはないぞ、リュウさん。
今ここで振り返らないと、死ぬまで後悔するって。騙すより、騙された方がいいんだから。騙されたと思って、振り返ってごらんよ。
もし、リュウさんが本当に彼のことを思っているなら、その時は・・・」

ゆっくりと振り返る、柏原。
ゆっくり現れる、後藤田。
その姿に柏原は驚く。
二人、対峙する。

柏原　「・・・・・」
後藤田「…お父さん」

ストップモーション
（ＢＧＭアップ、若しくは、ＢＧＭイン）（照明カットチェンジ）
ゆっくり暗転。

20場　エピローグ

照明インすると、メルカリの陶芸品を手にした柏崎。
松原が息を切らして入って来る。

柏崎　「なんでアンタが来るんだ？　あの若い子は？」
松原　「まだですか？」
柏崎　「来てないよ」
松原　「いくら探してもいないんですよ。連絡しても出ないし…。銀行はすっからかん、金融からも私名義で借りていて…、もう届けてないとおかしいんです。８０００万円ですよ」
柏崎　「そんなにいらないって」
松原　「え？」
柏崎　「若い子に持って来させなさいよ！　ハッキリ言うわよ。あの子がタイプなのよ、私！」
松原　「・・・・」
柏崎　「もう、じゃあ、あんたが払ってちょうだい、８０００円！」
松原　「嘘だあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

（ＢＧＭカットイン、照明カットアウト）
カーテンコールへ

終